

---

# ボロボドゥールとバリの闇

三上夏一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボロブドールとバリの闇

### 【Nコード】

N1747M

### 【作者名】

三上夏一郎

### 【あらすじ】

インドネシアの世界遺産、ボロブドールを二組の男女が訪れる。IT長者の三田敏はグラビア・アイドル出身のタレント、山岸ミカを口説くため、ミカは自分がCMに出たことで若者の自殺者を大量に生んだという脅迫状から逃れるため。大手消費者金融に勤める遠山康生は、自社のCMに出演し、自殺者を大量に出すきっかけとなった山岸ミカの責任を追及するため。康生の恋人、松村彩は精神的に不安定になった康生の身を案じて。二組のカップルを案内するインドネシア人のアルディは、ボロブドールの壁画に秘められた知ら

れざる話を紹介し、二組のカップルを魅了する。ボロブドールを離れた四人はバリ島で偶然に再会。そこにアルディも現れる。アルディは実はイスラム過激派のテロリストだったのだ。「墮落した西欧文明」に対してテロを仕掛けようとするアルディを、二組のカップルは力を合わせて説得し、思い止まらせようとするのだった。

ボロブドゥールとバリの闇

三上夏一郎

1 .

遺跡は丘の上に立っていた。周囲はきれいに整備された公園だったが、日射しを遮るものはなく、赤道直下に近い熱帯の太陽は、突き刺さるように露出した肌に降り注いだ。

「暑いな、まったく」

三田敏は、サマースーツのジャケットを脱ぎ、小脇に抱えた。若い割には太り肉の身体に、暑さがひどくこたえた。敏は立ち止まり、ズボンの尻ポケットから取り出したハンカチで額の汗を拭った。

「もう相当歩いたよお」

日傘を手にした山岸ミカが、うんざりとした口調で先頭に行くインドネシア人のガイドに話しかけた。

「まだ着かないのお」

「もうすぐですよ、もうすぐ」

ガイドのアルディは振り向くと、白い歯を見せてニツと笑った。

「がんばりましょー」

「ちよつと、この人さつきから同じことばかり言ってる」

不満そうに口を尖らせて、ミカが言った。

体のラインがはつきりとわかる薄手のワンピースのおかげで、スタイルのよさが強調されている。即ち、出るべき所は出て、ひっこむべき所はひっこんでいた。それも、極端に。日本人には珍しい体型だった。

「それにしてもアルディは元気だなあ」

ミカの後につき、再び歩き始めた敏は言った。

「幾つだよ、おまえ」

「ワタシですか」

嬉しそうにアルディは自分の顔を指さした。

「ワタシ、幾つに見えます?」

「にじゅう」

面倒くさそうにミカが答えた。

「どうせそんなもんでしょ」

「二十五歳! ハハハ……」

歩きながらアルディは、腰を折り曲げて可笑しそうに笑った。

「ワタシ、二十五に見えますか。そうですか!」

「喜んでるぜこいつ」

と敏は再び額の汗を拭った。

「つまり、もっと年だということか」

「そうかも」

「ワタシ、三十二ですよ、三十二。そして独身です」

「アルディ」

敏が言った。

「この国で、三十二歳で結婚してないっていつてことに、どういう意味があるんだ」

「話せば長くなりますよ」

「じゃあいいよ話さなくて」

「そうですか」

話したそうだったが、アルディはそれっきり口をつぐんだ。

遺跡に辿り着くための、最後の階段を登りきった時、敏が着ているコットンの解禁シャツは汗でぐっしりと濡れていた。喉はからからに乾いていたが、さすがにビールを飲みたいような気分にはなれなかった。

「すまん、アルディ、ミネラルウォーターを買ってきてくれ」

「わかりました！」

自称三十二歳というガイドのアルディは木陰の物売りスタンドに駆けて行き、冷えて汗をかいたミネラルウォーターを二本買って戻ってきた。敏は一本を受けとり、水を一気に飲み干した。

「ああ、生き返った」

「ほんとにお水がおいしいわ」

ミカもごくごく喉をならして水を飲んだ。

「さあ着きましたヨ！　こちらが、インドネシアが誇る世界遺産、チャンディ・ボロブドゥールです！」

アルディが両手を広げて、目の前にある遺跡をお披露目のように紹介した。

「なるほど。これが」

敏はハンカチで顔の汗を拭いながらその遺跡を見上げた。特にどうという感想もなかった。

「世界最大級の仏教遺跡にしては、小さいよね」

敏の感想を先取りするようにミカが言った。

一瞬困ったような表情を浮かべたアルディだったが、

「さ、それではこれからガイドを始めさせていただきます。ワタシについてきてください」

と気を取り直したように遺跡に向かって歩き始めた。

上空から見たボロブドゥールは、正方形である。小山を土台に、石を積み上げたピラミッドのような構造で、一説によると仏教のマンドラを立体化したものだという。一番下の壇は「基壇」と呼ばれ、その上に回廊を持つ壇が四層、重ねられている。回廊の壁には、仏教説話を元にしたおびただしい数のレリーフが隙間無く埋め込まれ、巡礼者はそれを見ながら壇を上へ上へと登っていく。最上階のストウパⅡ仏塔が建ち並ぶ壇に着く頃には、悟りの境地に達しているというのだが……

「それにしても、こんなに暑くちゃかなわないな。遺跡も、思っ

たより小さいし」

「ミタさん、ここでそんなバチ当たりなことを言っちゃいけませんよ」

遺跡の前に先に着いていたアルデイがたしなめるように言った。

「ああ、そうか。ここは聖地だったわけ。そうだな、バチが当たるのは嫌だな」

「やだなー、やつぱしバチって当たるのかな……」

敏の隣でミカがすねたような声をあげた。

敏の目はその大きくえぐられたワンピースの胸元に引きつけられた。マスコミにメロンを二つ並べたようなと賞賛されている、大きく形の良い乳房が深い谷間をつくっている。敏は目を細めた。ここまでこぎつけるのに、幾ら金を使ったか。しかし世の中結局金なのだ。金さえあれば、アイドルと呼ばれるこんな女も、海外旅行に連れ出すことが可能なのだ。金が無かったら、一生縁がない女に違いなかった。

「ねえミタビン、バチって当たるかな」

ふいにミカが自分の方に顔を向けたので、敏は慌ててその胸元から目をそらした。

「いや……そ、そんなことはある筈がないじゃないか」

「そうよね」

無邪気に笑うと、ミカは再びガイドのアルデイの方へ向き直った。

さあ、やつとここまで連れ出したんだ。今夜こそこの女と死ぬほどやりまくれるだろう

ミタビンこと三田敏は再びミカの胸元に視線を送ると、細い目により一層細くした。

ミタビンとは、敏にマスコミがつけたニックネームである。IT産業の寵児として、テレビに呼ばれ株の話をちよくちよくするようになり、気がつくともそういう名前で呼ばれるようになっていた。ニックネームが浸透するにつれ、更にテレビに登場する回数は多くなり、やがて敏を本名で呼ぶ者はいなくなった。今では自分でさえ、

三田さん、などと呼ばれると え、誰のことだっけ？ と一瞬返事が遅れるほどである。テレビの力は恐ろしい。しかしそのおかげでこうしてアイドルと呼ばれる女とも知り合いになり、インドネシアくんだりまで遊びに来ることもできるようになったのだ。

「ミタビンさんは日本でお仕事は何をなさっているんですか？」  
遺跡を背にして、ガイドのアルデイが敏に尋ねた。

「この人、すごいお金持ちでね、株を買ったり、会社を買ったりして、自分の会社を大きくするんだよ」

敏が答える先に、舌つ足らずな口調でミカが答えた。

「すごいんだよ。日本のチョー金持ちが集まる、ヒルズ、ってところに住んでるんだから」

「ハハ、日本人はみんなお金持ちじゃないんですか？ みんなベナンツに乗ってるでしょ」

とアルデイがミカに言った。

「そんな風に見られてるのが日本人は」  
呆れたように敏が言った。

「それじゃあODAでたかられる訳だ」

「ODAってなに」

「政府開発援助。発展途上国に金を貸して、道路や橋や工場をつくらせたりするわけ」

「ふーん……難しい話だねそれって。ところでアルデイは日本語上手だね。どこで習ったの？」

ミカはアルデイに話をふり、ODAの話はそれきりとなった。

「最初はやはり、日本の駐在員の人に習いました。あとは自分でドクガク、というやつです」

「えらい。すぐくえらいんだアルデイ」

「ありがとうございます」

アルデイはお辞儀をすると、唐突にガイドの口上を述べ始めた。

「えーそれではよくいらつしやいました。ワタシの後ろに見えますのが世界遺産のチャンディ・ボロブドゥール。チャンディとはお



寺という意味です。元々は昔この地方を治めていた、シャイレンドラ王朝の菩提寺として建てられたと考えられています。今ワタシたちが見ているところは、隠れた基壇と申します。実はこの、レリーフのある壇が本当はボロボドゥールが一番下の壇になるのですが、今は補強の為此の一角を残して全て石壇で覆われてしまいました」

「じゃあこの石を引っぱがせば画は見られるわけだ」

敏が 隠れた基壇 に歩み寄り、レリーフに顔を近付けた。

「そうですね。でもそんなことをしたら、遺跡は倒れてしまうかもしれません」

困ったような顔でアルデイが言った。

「ここに描かれているのは何なの？」

アルデイに助け船を出すように、ミカが言った。

「いまミタさんがご覧になっっているその絵は、飲酒の戒めと申します。お酒をたくさん飲んで、病気になった人が描かれています。仏教では、お酒を飲むことはよくないことのひとつとされています。皆さんは仏教徒ですから、ご存知ですよね？」

とアルデイは確かめるように敏とミカの顔を交互に見た。

「えー、よくわかんない……そうなの？」

ミカが敏の顔を覗き込む。

「仏教のことなんか、俺に聞くなよ」

敏は 飲酒の戒め と呼ばれるレリーフに見入った。言われれば確かに、酩酊し、家族に介護されているように見える男の姿がそこにあった。

「仏教信者が守らなくてはならない戒めは、五つあります」

二人の後ろからアルデイが近付いた。

「ひとつ。殺してはならない。二つ、盗んではならない。三つ、夫や妻以外の相手と、みだらなことをしてはならない。四つ、嘘・偽りを言ってはならない。そして五つ目が……」

「酒を飲んではならない？」

アルデイが言う前に、ミカが振り向いて答えた。

「その通り。よくご存知ですね」

「別に知ってるわけじゃないんだけど」

ミカが小首を傾げてぺろりと舌を出した。

「それを全部守るのは、相当難しいな」

冗談めかした口調で、敏が言った。

「そうかもねー、こちらのミタビンさんは、全部破ってるかもよ」  
にこにこしながらミカが言った。

「人の会社は盗んでるでしょ、嘘の情報流して株価を吊り上げるし」

「バカヤロー、俺は少なくとも人殺しはしてねえぞ」

「そうかなあ。直接手を出さなかったって、たとえば、ミタビンのせいでリストラになった人が自殺したりしたら、それって殺したことにならない？」

「知るかそんなもん。そんな奴のことまで考えていたらビジネスなんてやってられねえよ。おまえこそサラ金のCM出てるんだから、更にやばいんじゃないの。サラ金で自殺する奴の方が多いだろ」

「……かもしれない」

ミカの顔から笑いが消えた。下を向いたまま黙り込んだ。

「どうしたの？」

不安になったようで、敏はミカの顔を覗き込んだ。ミカは泣いていた。

「どうしよう……アタシ、バチ当たっちゃうかしんない」

「え？　なんで？」

「脅迫状が届いてたの、うちのマンションの郵便受けに」

「脅迫状？　どんな」

「アタシが　ニコニコクレジット　のCMに出てから、十人以上が自殺したんだって」

ニコニコクレジット　とは、ミカがCMの出演契約を結んでいる大手サラ金の名称だ。民間放送でサラ金のCMが解禁になって以

来、相当の広告費を使ってイメージ向上に努めてはいるが、実態は高利のサラ金であることに変わりはない。

「ひどいなそれは。だってミカが悪いんじゃないって、自殺する奴が悪いんだろ。弱いから手軽なところでサラ金から金借りて、にっちもさっちもいなくなってる」

「でもアタシがCMに出て煽らなければそんな気楽にお金借りて泥沼にはまって死なずに済んだ人たちかもしれないって。そんなこと言われたら、プレッシャーだよっぱり」

「気にすんなよそんなこと。それより一体誰がそんな脅迫状を……おまえのマンション知ってる奴なんて限られてるだろ」

「そういえばそうね」

「ひよつとしたら、関係者じゃねーか」

「そうか……そうだわきつと」

「あのー、そろそろ次のパネルに行つていいでしょうか」

恐縮した口調でアルデイが二人に尋ねた。その一言で敏とミカはようやく自分たちが世界最大級の仏教遺跡に來ているということを感じ出したようだった。ミカの両肩に手を置くと、敏は言った。

「この件はホテルに帰つてじっくり話すことにしよう。ごめんね、アルデイ。ガイドを続けてくれ」

「ありがとうございます」

アルデイは丁寧に二人に頭を下げると、隣のパネルへ歩を進めた。

「隣のパネルは 醜い顔 です。悪いことをすると人相が悪くなる。怒りや憂い、心配事は 醜い顔 になつて現れる、という仏さまの教えです」

そのパネルのレリーフには、確かに醜悪な顔の人間たちが集まつて、何やら企みごとを話し合っている図が描かれていた。敏はぎょつとした。その図を見て、心に浮かんたのが自分の会社の企画会議の様子だった。見れば見るほどその絵柄は、自分の会社の企画会議に似ていた。

「どうしたの？」

醜い顔のパネルの前で、腕組みをして唸っている敏にミカが尋ねた。

「いや　なに、ちよつとどこかで見た感じの風景だっと思ってさ」

と敏は誤魔化した。

「自分の会社だつたりして」

ぼつりとミカが言ったので敏はぎくりとした。芸能人だけあってミカは妙に勘が鋭いところがある。

「まさか」

敏はあくまで冗談めかして応えるほかない。

「だから、俺の会社はそんなに悪いことはしてないって。ホント、ホント、ホント」

「自分の顔、ホテルに戻って鏡で見てみる？」

トゲのある口調だった。ミカの機嫌は直っていなかった。

「何言ってるんだよ、俺は指示出してるだけなんだから。悪だくみには加わってない。だから大丈夫なんだよ」

敏は訳のわからない言い訳をミカに返した。

アルディは咳払いをすると、

「隠れた基壇　には、人間の善行悪行について説かれた、百六十ものパネルがありますが、残念ながらそのほとんどはこうして補強の石で覆われてしまって実際に見ることはできません」

「ほおー。それは残念というか……ある意味ではホッとしたというか……だな」

「残りのパネルには、どんなことが描かれているのかな」

「ほとんどが、因果応報の教えです。即ちよい行いをすればよい結果を生み、悪いことをすれば必ず悪い結果が返ってくるという、善因善果、悪因悪果の教えです」

「そんなこといちいち気にしてちゃビジネスは続かないよ」

「芸能界でも生きていけないかも……」

「そうですか。皆さんはそういう厳しい世界に生きていらっしや

るわけですね」

決して皮肉めかした口調ではなく、アルデイが言った。

「まあね。さ、ここはもう見るものないんだろ？ もっと上を見  
てみようぜ」

敏はアルデイを促し、三人はボロボドゥールの東の登り口へと向  
かった。

階段の段差は思ったより大きく、傾斜は急だった。三人は鉄製の  
手すりに掴まり、基壇から第一廻廊と呼ばれる石の廊下への石段を  
登った。

「ここには、お釈迦さまの生涯がパネルとなって並べられていま  
す」

階段を登り切ったところでアルデイが言った。

「そしてこの廻廊は、こうして東の門から入り、時計回りに見て  
いくのが正しい順番です。さ、参りましょう」

アルデイが、歩きながら釈迦の生涯についていろいろ解説してく  
れるのだが、ほとんど敏の頭には入らなかった。それよりも、先刻  
下で見た 隠れた基壇 の因果応報の教えが妙に心に引くかかる。

幾つもの会社を買収しては売り払い、大量の解雇者を生んだ

中には自殺した奴もいる。子供が進学を断念した家庭。奥さんが  
出て行って途方に暮れている男。抗議のメールを見るとときりがな  
い。だがしかし

釈迦の生涯を描いたパネルを見ながら、敏の考えは膨らんでいっ  
た。

「強い者が勝つんだよ」

「え？」

先に行くアルデイが立ち止まって振り向いた。

いつの間にか、ミカまでが先を歩いている。

「何か言った？」

日傘の下で、ミカが小首を傾げた。

「アルディに質問？」

「いやその……独り言だ。ハハ」

敏は笑って誤魔化した。最近独り言を他人に指摘される機会が増えていいる。気を付けているつもりなのだが、治らない。

ストレスかな

敏は日本にいる時の自分の日常生活を振り返った。とにかく、自分の会社を大きくすることだけを考えて突っ走って来た。その先に何があるかはわからなかったが、頭の中にあるのはそのことだけだった。金を儲けて何をしようという目的があった訳ではない。資産もコネもなかったから、多少悪どいと思えることにも、幾度となく手を染めてきた。三六五日、働きづめのような気もしたが苦にはならなかった。誰も信用せず、ひとまかせにはしなかった。そのおかげで、会社は順調に成長を重ねてきたのだ。

「まさか。ストレスなんて。ハハ」

また独り言が出てしまった。しかしこれは幸い、先に行く二人には聞こえていなかったようだ。アルディはミカに一所懸命に話しかけ、ミカは手を叩き過剰とも言える反応を示していた。

「ね、知ってるミタビン。お釈迦さまって、セレブだったんだよ。シヤカって国の、王子様だったんだって」

ミカが歩み戻って敏の腕をとった。

「ね、一緒に歩こう。アルディの解説、面白いんだよ」

すこし機嫌が直ったようだ。まったく芸能人ってやつは気まぐれでわがままというのは本当だな……とすこし嫌な気持ちになりながら、敏はミカに腕を引かれてアルディが待っている場所まで歩いた。二人が来るのを待って、アルディは一枚のパネルを指さした。

「このパネルは、王子シッタルーダが王宮の外に出て、痩せ衰えた老人を目にするシーンです」

「シッタルーダってというのは、お釈迦さまが王子様だった頃の名前なのね」

すこし得意げにミカが解説を付け足した。アルディの解説を、今

まで熱心に聞いていたことがわかった。辛気くさい仏教遺跡の解説にミカが興味を示すとは意外だった。

「シッタルーダはショックを受けます。なぜなら王宮の中では、そつした老人を目にしたことはありませんでしたから」

「ね、どうして王宮の中ではお年寄りを見なかったのかなあ？」

ミカが小首を傾げるお得意のポーズで敏とアルデイ、どちらともなく問いかけた。

それは彼女が出演するサラ金のCMの、最後のお決まりのポーズだった。さんざん金を借りることの手軽さを煽っておいて、最後に彼女が小首を傾げ、「でも借りすぎには注意しましょ」と締めくくるのである。彼女が出演したおかげで、そのサラ金は若者の借り手を爆発的に獲得していた。中には厳しい取り立てに遭い、自殺する者も増えているという。敏はミカのこのポーズを見ると、あのサラ金のCMを思い出す。

「老人はさつさと自殺して一人もいなかったとか。年とつたら王宮から追放されるという決まりがあったとか。そんなところじゃないか」

と敏は答えた。

「アルデイは、どう思う？」

敏の答えに納得できなかったのか、ミカがアルデイに尋ねた。

「それは 昔から人間の心の中に、年をとるとは嫌なもの、汚いものという考えがあったからではないでしょうか。嫌なもの、汚いものはなかなか目に入らない、あるいは知らず知らずのうちに避けて、見ないようにしているからだと思うのです。たぶん、シッタルーダに関して言えば、王宮の人々がそういう考えで王子様には見せなかったのだと思います」

「ほう。アルデイくんもやるじゃないか。少しは物を考えてるんだな」

敏は、根拠もなく自分より知性が下だと思っていたインドネシア人のガイドが、自分より説得力がある考えを述べたことに内心驚き、

なぜだか嫌な気分になった。

「ありがとうございます。ショックを受けたシッタルダは、あの人は何？ 一体どうしてあのような姿をしているの？ とお付きの人に尋ねます」

「難しい質問ね」

パネルに彫られた 老人 の姿を見ながらミカが呟いた。

「つまり、老人を見たことのない人に老人を説明しろということか。そりゃ難しいかもな」

と敏は賛成した。

「はい。お付きの人は答えました。あれは老人と申します。老人とは、昔は若かったが、すっかり体力が衰えてしまい、気力もなくなり、食欲も少なくなり、身体も枯れ、勢いもなくなった人のことを言います。そうなると周りもその人を無視するようになり、病気には弱く、命はあと数えるほどの日にちしかありません」

「かわいそー」

とミカが言った。

アルデイの話は続く。

「シッタルダは更にお付きの人に質問します。老人になるということは、この人に限ったこと？ それとも、誰もがそうなるの？」

「ちよつとバカっぽい質問だな。人間誰しも年をとるのは常識じゃないか？」

敏がちやかしたようにいうのを無視して、アルデイは続けた。

「お付きの人は答えました。この世の誰もがそうなります。すべて命ある者は、尊い人も、卑しい人も、金持ちも、貧乏人も、美しい人も、醜い人も、皆やがては 老い という苦しみを体験することになるのです」

「やだなー、年をとるなんて」

三人の中でいちばん年齢が若いミカが、しみじみと言った。

特に、お前のようなアイドルには死活問題だろう



敏はミカを横目で見ながら心の中で呟いた。

二十一歳になったばかり。その身体ははち切れんばかりで、どこにも衰えの兆候はない。幼い顔立ちに関わらず、その胸は信じられないほど豊かだ。そのギャップが特に若者にはたまらないらしく、二年前グラビアアイドルとしてデビューするとたちまちその世界では伝説的存在となった。その人気に大手芸能プロダクションが目を付けて引き抜き、今やマルチタレントとしてこの道を歩み始めている。

この女のこの体も、やがては老いてしぼんでしまうのか……

そのことがどうしても信じられず、敏はミカの体を思わず上から下までじろりと見てしまう。

「やだミタビン、何じろじろ見てんのよもう。エッチなこと考えていたでしょう」

敏の視線に気付いたミカが、口を尖らせた。

「いやその……ミカちゃんのその体も、年とって崩れていくなんて信じられなくてさ」

しどろもどろに敏が言った。

「ならないわよそんなふうには」

意地になった口調でミカが言った。「ぜったい、年なんかとらないんだからアタシは」

敏は言うべき言葉を失った。タイミングよろしく、

「さ、次のパネルに参りましょう」

とアルデイが言ってくれたので助かった、と思った。

「お釈迦さまが次に出逢ったのは、病人です」

アルデイは次のパネルの前で立ち止まった。

「シッタルーダは再び、お付きの人に尋ねました。病人とは、どういうものか？」

「それは、ばい菌に冒されて体の具合が悪くなった人のことですよ？」

とミカが言った。

「いいえ。お付きの人の答えはこうでした。いわゆる病気とは、飲み食いに節制がなく、適正な量を考えず、好きなだけ飲み食いした結果、体が不調和を起こした状態のことを言います」

「生活習慣病だ」

敏は思わずパンと手を打った。

「大昔から、そういうことであつたんだなやつぱり」

「シッタルーダは再びお付きの人に尋ねます。この人だけが、そうだったのか？ それとも、誰もがこのようになるのかと」

「そりゃあ、病気に罹らない人は世の中にいないよなあ」

「その通りです、ミタさん。お付きの人はシッタルーダに答えて言いました。全て命ある者は、たとえ尊い人でも、卑しい人でも、金持ちも貧乏人も美しい人も醜い人もいつかは病気に罹ります」

「アタシは大丈夫。食べ物、氣遣つてるし」

ミカがすかさず言った。自分で自分を安心させるような口調だった。

「ミタさんは、どうですか？」

とアルデイが敏に視線を送った。

「俺は　その、ちよつと糖尿氣味で、痛風の氣もある。コレステロール値もが高いし」

「では、氣を付けなければなりませんね」

「わかつてるよ。言われなくてもわかつてるさそんな事は。だが仕事のストレスを考えると　ついつい飲み食いが荒くなる」

「奥さんとか、何も言わないの」

「言うさそりゃあ。口うるさい程にね。おいおい、こんな所で君までそんな事言うのは勘弁してくれよ」

うんざりとしたように言うと、敏は氣を取り直すように、

「さ、アルデイ、次のパネルに案内してくれ」

とインドネシア人ガイドの肩を叩いた。

「次にシッタルーダは死人を目撃します。あれは何？ と尋ねるとお付きの人は言いました。あれは死人です」

アルディは次のパネルの前に二人を導いた。

「死とは何ですか、とシツタルーダは尋ねます。死とは 魂が体から抜け去って、命のもとがなくなることです。長く一緒に暮らしてきた父母、兄弟、妻などと離れ離れとなり、二度と再び会うことがない。命が終わってから、魂がひとり去って、別の場所へ向かいます。好きも嫌いも、暑いも寒いも、嬉しいも悲しいも、もはや何も感じることはありません。そしてこれも唯一人の例外もなく金持ちにも貧乏人にも、美しい人にも醜い人にも訪れます。全て命ある者は、誰も死から逃れることはできないのです」

「そうだよなー、人間どうせ死んじゃうんだよなー」

敏の口からまた独り言が出た。あ、いかん、と口を手で覆い隣のミ力を見ると、大きく見開いた目から涙をボロボロとこぼしているのだ。

「どうしましたか、ミ力さん」

とアルディが歩み寄り、優しく尋ねた。

「私 何だか去年亡くなったおばあちゃんのこと思い出しちゃって」

「アルディくん」

敏が言った。

「何だか今日は疲れたな。一旦ホテルに戻って、また明日出直すことにしてもいいかな。どうだろう、ミ力ちゃんはそれで」

敏が提案するとミ力はうんうんと頷いた。

「そうですか。わかりました」

アルディが大きく頷いた。

「この遺跡を、ゆっくりと時間をかけて見ることはとてもいいことです。昔の人はきつとそうやって、何日もかけてボロボドゥールにお参りしたに違いありません。今はみんな、駆け足でこの遺跡に登り、何も得ることなく帰って行きます。それではもったいない。また明日、来ることにしましょう」

ツアー会社の用意したトヨタ・ハイエースで、アルディが二人をジヨグジャカルタ市内のホテルへと送った。ジヨグジャカルタは、ジャワの京都　とも呼ばれる古都である。学校が多く、学生が多い。市内の道には、若者たちが乗る小型バイクが溢れるように走り回っていた。

「ああ、何だか疲れた」

冷房の効いた部屋の中に入るなり、敏はツインベッドのひとつに大の字に倒れ込んだ。

「シャワー浴びてくるね」

ミカはバスルームに消えた。シャワー浴びたら、とりあえず一発やってやるかと思っっているうちに、いつしか敏は眠りに落ちていた。

「ウワァー！」

叫び声と共に、敏はベッドから起き上がった。

「どうしたの？　大丈夫？」

すぐそばにミカの顔があった。

「いや　すごく恐くて　夢だったのかあれは」

額の汗を拭くと、敏は厚手のバスローブをまとっただけのミカをベッドに押し倒した。

「いやだミタビン、だめよそんな」

ミカはバスローブの胸元の襟を両手でしっかりと握り、自分を守るように引き寄せた。

「いいだろう別に。こんな所まで来て今更何言っただよ」

敏はミカの唇を奪おうと顔を近づけた。ミカは顔をそむけ、

「だめ」

ときっぱり言った。

「何だよ。ここ迄来たんだから、いいだろ？　いい年した大人と一緒に旅行に来たってことは、そういうことじゃないのかよ」

「だってアタシ、ミタビンのこと愛してないんだもん」

ミカの整った横顔は、断固たる拒絶の意志を伝えていた。

「それ以上のことしたら、アタシ、ゴークン罪で訴える」

冷たく美しい横顔を敏に向けたまま、ミカが言った。

「分かったよ」

きれいな女が、毅然とした態度をとると、それはそれでなかなかの迫力である。

ひとまずは引き下がるか

悔し紛れににやりと笑うと、敏はベッドから降りた。

「俺も、シャワー浴びてくるよ」

バスルームに向いながら、

遅かれ早かれ……

と敏は考えを巡らしていた。ジヨグジャカルタでは金をけちってハイアット・リージェンシーに泊まってしまったが、バリ島に行けば最高級のアマン・リゾート系のホテルを予約してある。それも一泊千ドルもする、プール付きのスウィートだ。これまでも、金の力でこれと思った女はものにしてきた。そして、自分に備わった武器はそれしかないのだ。

バスルームの鏡には、年齢の割にはたつぷりと贅肉のついた己の醜い姿が映っていた。四十を目前にして、早くも糖尿病の傾向がある。先刻ミカをベッドに押し倒した時には勃起していたペニスはその包茎に姿を戻している。敏は顔を鏡に近づけた。ボロボドゥールで見た 醜い顔 のレリーフを思い出す。

「確かに、あの中にもおかしくないかもしれないな」

鏡に映る自分の顔に向かって敏は呟いた。金のためなら、と結構危ない橋は渡っている。大きな金のためには、己の小さな悪行には目をつぶるしかない。いや、大きく儲けるためには、多少の悪は絶対に必要な。それがこれ迄の人生で培われてきた敏の人生哲学だった。当然周囲にも同じような考えの、まっとうではない輩が集まっている。

「醜い顔。悪因悪果か。昔の人はうまいことを言うもんだ」

ぬるめのシャワーを頭から浴び、備え付けのシャンプーで頭をこ

しごとと洗っていると、たつぷりをついた腹の肉がぷるぷると震えた。自分が醜いという点は、子供の頃から自覚している。そのハンディを克服するのは金か、と考え、必死に勉強し、知恵を絞って生きてきた。その仮定は当たっていた。世の中に、金で買えないものは無かった。これ迄は。どんな女だって、最終的には金の力の前では形無しだ。山岸ミカの場合は、少し手間取ってはいるが

「まあそれも、時間の問題さ」

ミカの肉体を思い浮かべると、再びペニスが頭をもたげてきた。

「おっと君、あと少しの辛抱だよ」

敏はシャワーの温度を下げ、冷たい水を己の股間に浴びせると、自らの手で固くなった肉をしごき始めた。

「ああ、さっぱりした」

と、バスローブを羽織った敏が出て来るのと入れ違いに、ミカはバスローブへと向かった。ミネラルウォーターで口をゆすぎ、バシヤバシヤと水道水で顔を洗う。濡れたままの顔を、洗面台の鏡に映した。ふとボロボロウールの 醜い顔 のレリーフが顔に浮かんだ。

「でも、醜くなったら整形しちやえばいいんだもんねー」

鏡の中の自分に向かって言うと、再び自分の顔を見つめた。

カンペキだわ……

思わずうつとりしてしまふ。

自分の顔であって、自分の顔じゃないんだけど

この顔は、アイドル山岸ミカのものだ。ぱっちりとした目は、整形で二重にした。小さく、厚ぼったいところがセクシーだと評判の唇にはシリコンが入っているし、鼻の頭だってオリジナルより少し高くしてもらった。結果、若干横に広がり気味だった鼻の穴も縦方向に引つ張られ、小さくすっきりとした印象に仕上がった。

「いじってないのは、自慢のこの体だけだもんねー」

ミカは、メロンを二つ並べたような と形容される豊かな乳房の下に手を添え、持ち上げると手を放した。ぷるん、と二つのメロ

ンが揺れた。みずみずしさと弾力は、まるで失われていなかった。

それにしても……

しばらく前から続いている、嫌な気分はまるで消えていなかった。海外旅行にでも行けば気が晴れるかもしれないと、ミタビンこと三田敏におねだりしてインドネシアまで来てみたというのに。しかも、今日ボロボウルで 老い や 病 や 死 にまつわる話を聞いたことで、どんよりとした不安は更に大きく広がりつつある感じだ。

アタシの肉体にも、いつしか老いが忍び寄る。年をとって、弾力を失い、シワシワになって

そう思うと、何だか居ても立ってもいられない気分になった。しかしどうする解決のあてがある訳ではない。

「この、セツコーチョーのうちに誰かに高く売り込んだ方がいいかしら」

ミカは鏡の中でしなをつくった。

「オツパイー人でもんで、何ブツブツ言ってるわけ？」

その声にハツとしてミカが振り向くと、バスルームの入り口に敏が腕組みをして立っていた。

「あーヤダ。黙つてのぞくなんて。サイテーだわ」

一転してむくれて見せるミカに、

「あ、いや、腹減っちゃってさ。何か食いにいきたいと思って……」

言い訳するように敏は頭を掻いた。

アルデイを呼び出し、レストランまでの送迎を頼んだ。向かった先は、地元ではポピュラーな、アヤム・ゴレン という鶏の唐揚げがおいしいと評判の店だった。

「インドネシアでは、よく呪い師にものを頼みます」

テーブルに案内され、メニューを広げながらアルデイが言った。

「たとえば、家の中で物がなくなるとすぐ呪い師を呼びます」

「それで、出て来るの？」

興味深そうに、ミカは身を乗り出した。

「はい。なくなってから時間が浅ければ浅いほど、見つかる確率は高くなります。なくなつてすぐならば、まず分かります」

「へえー、他にはどんな時に、呪い師を頼むわけ？」

地元のビール、ビンタン をコップで飲みながら、関心なさそうに敏が尋ねる。

「よく聞くのは、事業を大きくしようとする呪いです」

「ほう？」

今度は敏が身を乗り出す番だった。

「たとえばこのお店」

アルデイが声をひそめて言った。

「あそこに、オーナーの肖像画がかかっています。彼は学歴もコネもありませんでしたが、一代で大成をおさめました」

ミカと敏は、アルデイが目で指した方向を見た。五十代ぐらいのヒゲを生やし額が少し後退気味の、背広姿のインドネシア人男性の肖像画だった。

「今はもうお爺ちゃんですけど、彼がこの店を開き、インドネシア中にチェーン展開しました」

「で、あの人が、店を大きくするのに呪い師を使つたわけ？」

敏がアルデイに囁いた。アルデイは辺りを見回し、小さく頷いた。何故か重大な秘密を話し合うような空気がテーブルを包んでいた。

「ジョグジャカルタから車で一時間ほどのところに、黒魔術で有名な山があります。普通の人は怖がって、誰も近寄らないような所です」

その山の呪い師は、いわゆる黒魔術「ブラック・マジック」を駆使する。依頼人の願いは叶えられるが、その為に依頼人は、自分の最も大切な人を犠牲者として指名する必要がある、というのがアルデイの語った、黒魔術にまつわる話だった。

「でさ、このオジサマは……」



ミカが肖像画をあごで指した。

「何を……誰を犠牲にしたわけ？」

「彼の娘の一人は、幼くして死にました。川で溺れたか何かで。その後店は大きくなり」

「ひつどーい」

アルディの言葉を、ミカが遮った。

「すると、自分の子供を生け贄に捧げたわけか……」

ビールを飲みかけていた敏が、思わず手を止めて店の主人の肖像画を見上げた。

「怖いおっさんだな」

「あくまでも噂ですよ。誰も、彼がその山に行ったのを、見た人はいないんですから」

ウェイターが料理を運んできた。アルディは席を立った。

「私は家で済ませてきましたので。運転手と、外で待ってます。では、ごゆっくり」

アルディはミカと敏に一礼すると、店を出て行った。

「しかし、ちょっと信じられない話だな」

鶏のから揚げを手に取りながら敏が言った。

「自分の子供を生け贄に捧げるのはさすがになあ」と言いながら敏はから揚げにむしゃぶりついた。

「うまい」

「やっぱりこういうのって、手で食べた方がいいわよねー」

ミカもから揚げに手を伸ばして一口嚙った。

「おいしい」

「ひどいおっさんだけど、出す料理はうまいな」

「チェーン展開するだけのことはあるわね」

二人はむしゃむしゃと、鶏のから揚げを食べ続けた。

ダブルベッドが二つ置かれたホテルの部屋に戻ってから二人は、別々のベッドで眠りについた。

「ねえミタビン、気になってることがひとつあるんだけど」

電気を消し、真っ暗になった部屋のベッドの上でミカは天井の闇を見つめていた。

「ん、何だい？」

暗がりの中から、敏の声が返ってきた。満腹になったせいか、眠気をはらんだ声だった。

「あの、因果応報のことなんだけどね」

「ああ。ボロボドゥールの」

「たとえばね、アタシの出演した、サラ金のCM見てお金借りた人がいるとするでしょう？」

「そういう奴は、君のスポンサーのサラ金だけじゃなくて色んなところから借りてんじゃないか。気にすることはないさ」

「でもその人がもし……アタシのスポンサーの会社から厳しい取り立てに遭って、自殺しちゃったら？　そういうのにも、因果応報ってあるのかな」

思い切って打ち明けたつもりだった。しかし敏から反応は返ってこなかった。

「それでその、自殺した人が、アタシのこと恨んでやるって遺書に書き残してたりしたら、どうすればいいと思う？」

ミカは敏が寝ているであろう闇の中に目をこらした。敏は既に、規則正しい寝息をたてていた。

「ばか」

ミカは呟いた。

翌朝　大きなホテルの常として、朝食はスモーガスボード、いわゆるバイキングスタイルである。自分が好きなものを好きなだけ食べられるこのスタイルが敏は好きだった。それは、子供の頃家が貧しく、好きな物を満足に食べられなかった反動かもしれない。昨夜はよく寝たな――

朝から旺盛な食欲を見せ、敏は皿に山と盛られた料理を平らげて

いく。対照的に、ミカのプレートには少しのフルーツが乗っかっているだけだった。

「アタシあんまり眠れなくて……あの、ブラック・マジックの話も怖かったし。インドネシアって、何か、霊が多いって言うじゃない？ ミタビンはさつさと寝ちゃうし……」

「ああ、あの鶏のから揚げ屋のおっさんの話にはちょっとびびったね。あれはあんまりだ」

「ねえミタビン」

「何だよ朝から改まって」

「もしミタビンが、今の事業もつと大きくしようと思って、例のブラック・マジックの山行くとするじゃない？ 誰を犠牲にする？」

「よせよ朝からそんな縁起でもない話」

「奥さん？ お嬢ちゃん？ 誰か一番大切に思っている人を差し出さないといけないんだよ。それとも……アタシってことも、あり得る？」

「よせつたら。怒るよ、もう……そんなのその時になってみなきやわかんないじゃだろ。あ、俺、ちょっとコーヒー取ってくるから」  
敏は慌ただしく席を立った。それ以上この話題には触れられなかった。あの話は怖かった。何が怖いと言って、いざとなったらその黒魔術の山へ出かけるであろう自分の姿が頭に浮かんだからである。その時、誰を犠牲に捧げるのか……そのことは考えたくはなかった。

それにしても……

敏はコーヒーをポットから注ぐと、テーブルでぼんやりしているミカの姿を盗み見た。

どうしちゃったんだあの女。ちょっと、様子が変だぞ

アルデイが迎えに来て、敏とミカはその日、午前中の早い時刻にボロブドゥールへと向かった。

「右手に見えるのが、メラピー山です。今でも活動を続けている、ちよつと怖い火山ですね」

トヨタ・ハイエースの右側の窓越しに、形の良い円錐形の山がシルエットになって見えた。

「ちよつと、富士山みたいな形の山ね」

山を横目で見やりながら、ミカが言った。

「一説によると、あの山の噴火のおかげでボロブドゥールを造ったシャイレンドラ王朝は滅び、ボロブドゥールも火山灰に埋もれたとされています」

「ほう。神の怒り、ってやつか。自然には世界最大の仏教遺跡も形無しだったってことだ」

敏が茶化すように言った。すると、

「およそ全ての物事は、変化してやまない」

と静かな口調でアルデイがたしなめた。

「お釈迦さまはそう説かれました。だから、執着してはいけけないのだ、と」

「わかったよ。怒ってるだろまた？ そんなに怒るなつて。別にお前さんの国の大切な遺跡をバカにしてる訳じゃないんだから」

アルデイに睨まれた敏は、恐縮するように言った。

「ところでアルデイ、お前さんずいぶんお釈迦さまの肩持つけど、仏教徒なの？」

「いいえ。ワタシはイスラム教徒です。この国のほとんどの人は、イスラム教徒ですよ」

「ねえアルデイ、どうしてイスラム教徒になったの？」

興味を覚えたようで、ミカが助手席のアルデイの方へ身を乗り出した。敏とミカは、ハイエースの二列目の席に座っている。

「さあ。知りません。生まれた時から、イスラム教徒ですから。

お父さん、お母さんがワタシをイスラム教に入れました」

「まあ……そうだったの。それにしてもは仏教のこと、詳しいのね」

「まあ、仕事ですから。ヒンドゥー教についても、詳しいですよ。イスラム教徒は、他の宗教に対して寛容なんです」

アルデイはようやく笑顔を見せた。

「ところで皆さんは？ ブッディストですか、やはり？」

敏はミカと、顔を見合わせた。

「うちの葬式には、一応坊主が来るな」

「アタシのところも」

「では、お二人とも仏教徒ですね。お釈迦さまの教えは、ワタシよりよく知ってるんじゃないですか？」

少しからかうような口調でアルデイが言った。

「いやそう言われると……」

敏は頭を掻くしかなかった。

「全然知らないわ、アタシ、お釈迦さまの教えなんて……」

ミカは舌を出した。

アルデイが大きな声で突然ガハハ、と笑い、運転手の肩を叩くと何事かをインドネシア語で語りかけた。

「オウ、ヤー」

運転手は二度、三度と大きくうなずき、ハハハ、と笑った。

「ね、何話したの」

ミカがすかさずアルデイに尋ねた。

「いやー、日本人って不思議ですよ、自分の宗教の教えを全く知らない。仏教徒なのに、仏教のこと何も知らないんだから」

アルデイが笑いながら答えた。

「やだなー、何か、バカにされた気分……」

ミカが言つと、

「大丈夫。あなたがたが特別という訳ではありません。ここに来る日本人、みんなそうです。でも安心してください。チャンディ・ボロブドゥールをワタシと一緒にちゃんと回れば、仏教がわかるようになります。お釈迦さまの教え、わかりますから」

アルデイを先頭に、ミカ、敏という順番で、三人はこの日もボロブドゥールの東門から石段を登った。

「昨日は第一廻廊を回ったから、今日はまずその上だな」

敏がアルデイの背中に声をかけた。アルデイは振り向くと、

「いいえミタさん、今日は最初に、もう一度第一廻廊を回りましよう」

と言った。

「えーどうして？ 同じじゃん、それじゃ昨日と」

ミカが額の汗を拭いながら文句を言う。

この日も、前日と同じような天気だった。南国の太陽が、真上から容赦なく照りつけていた。わずかな違いといえば、昨日より少しだけ雲が出ていることだ。ほんの時たま、その雲が直射日光を遮ってくれる。と、いうことは、雲に動きがあるということだ。即ち、すこしだけ風も吹いている。それにしただって暑いことには大して違いはない。それに、ボロブドールの廻廊にいと、直射日光に照らされた石がやがて熱を持ち、そこにいる者たちはちよつとした蒸し焼き状態になるのだ。

「早く上が見たーい」

子供が駄々をこねるように、ミカが言った。

「ダメです。ここが実はボロブドールでいちばん重要な部分だと唱える研究者もいるのです。さあ」

アルデイはミカと敏を再び第一廻廊へと導いた。

「今日は下の段を見てください。上の段のパネルは、昨日見たお釈迦さまの生涯ですね。下の段には、全く違う仏教説話が彫られているんです。よく見て下さい」

アルデイに促され、ミカと敏は下の段のパネルを覗き込んだ。

「確かに、上の段とはちよつと絵柄が違うみたいだな」

胸元に流れる汗をハンカチで拭いながら敏が言った。

「アタシには、同じように見えるけど」

「下の段に繰り広げられるのは、お釈迦さまの前世の物語です。お釈迦さまは、ブツダになる以前、何度も何度も生まれ変わっています」

「うらやましいもんだな。俺も、生まれ変わるならすぐにでも

そうしたいな」

例によつて敏が茶々を入れると、アルデイが睨み付けた。

「わかったよ、睨むなつて。話はちゃんと聞いてんだから」

「ねえアルデイ。人間つてやつぱ、生まれ変わるのかしら？」

「それは、仏教の基本的な考えではありませんか？ 輪廻、という言葉、聞いたことあるでしょう」

「うん」

ミカが素直に頷いた。

「仏教用語だったのね、あれつて」

「命ある者は死後、迷いの世界である三界、六道に生まれ変わつて行つたり来たり……人間界もその中に含まれます。地獄に落ちたり、絶えず腹を空かせている餓鬼の世界に投げ込まれたり……畜生道といつて動物に生まれ変わつたりして、一步一步迷いのない、悟りの世界へ近付いて行くのです」

「アルデイくん。君は本当にイスラム教徒か？」

アルデイの仏教に関する知識に感心して、敏が言った。

「イスラム教徒もまた、来世を信じています。たとえ生きているこの世で幸せじゃなくても、アッラーを信じ、善行を積みめば、死んだ後最後の審判を受けて天国に行けると。ブツディストの生まれ変わりとはちよつと違いますけど」

「最後の審判つて、やつぱ、あるのかしら」

「イスラム教徒は少なくともそれを信じています」

「俺は無宗教だから関係ないね」

強気を装い、敏が言った。

「俺は来世なんか信じないぞ。生きてる今が楽しくなくてどうするんだ。それに、一度死んで生まれ変わってきたつて奴なんかお目にかかったことがない。つまり、そんなのあり得ないんだよ」

「そうね……それも一理あるような気はするわ」

珍しくミカが敏に同意した。

「アタシもやつぱり、今が楽しい方がいいな」

アルディは微笑みながら、

「日本人はみんなそう言いますね。今さえ良ければいいって。そんなに明日が、未来が不安なんですか？」

「不安だね」

敏は自分の足元に目を落とした。

「だから少しでもヒマができると、何とかして埋めなきゃ、って気分になる。そしてバカみたいに働いて……金と時間を無理矢理作って、こうしてボロボロに來たってわけ」

「でもそのおかげでワタシはミタさんに会えました。そういうことを仏教では ご縁 と呼ぶんじゃありませんか？」

「そうだな……うまいこと言うなアルディ。それじゃ、そのご縁とやらでパネルの解説でも始めてくれ」

「わかりました」

アルディは一礼して、語り始めた。

「これは、 マノハラ物語 というラブストーリーです」

アルディの語った物語は、次のようなものだった。

お釈迦さまの前世のひとつの姿である、スダナ王子は、漁師が魔法の力を持つ投げ縄で捕らえた天女、マノハラと恋に落ち、妻とする。

しかし王子の留守中、国王が見た不吉な夢のせいでマノハラは生け贄にされそうになり、故郷である天に飛び立ってしまう。

妻の突然の失踪を知った王子は、彼女を捜す旅に出る。そして七年七ヶ月と七日、マノハラを探し続けた王子は、遂に再会を果たす。喜びも束の間、今度はマノハラの父親が、王子が娘の本当の夫であるかどうか、疑いを抱く。マノハラの父はスダナ王子に二つの困難な試練を与え、これに挑み解決した王子を見て、ようやく疑いを解くのだった。

「二人の結婚をようやく認めたマノハラの父は、スダナ王子に向



かつて言いました。一度妻となった者を決して捨てるな。また、別の妻を持つことなど、するな。」

最後のパネルの前まで歩いて、アルデイは話を結んだ。

「結婚する時は、そんなことは思わないんだけどな」

ため息まじりに、敏が言った。

「不倫はいけないってことかあやっぱり」

感情のない声で、ミカが言った。

「でも、七年と七ヶ月も王子様が探し求めてくれるなんて、その女のひと幸せだわ。ミタビンなんか……」

話がいきなり自分の方に振られたので敏はぎよつとしてミカを見た。ミカはその場にいきなり力無くしゃがんだ。

「アタシがいなくなったって、きつと痛くも痒くもないもん。探したりなんか、するもんか。きつと次の日から、別の女に乗り換えるんだわ」

「どうしたんだよ、ミカちゃん」

敏もしゃがんで、ミカの顔を覗いた。思いがけないことに、ミカは泣いていた。

「アタシ……今は人気あるからいいと思うのよね。でも人気なんか永遠に続くもんじゃないってことは分かっているし……その時が来たらどうしようって、不安で堪らなくなる時があるの」

「よせよ。そんなこと考えるのは。弱気になったら駄目だ。この世界、強気で乗り切っていかなくてどーすんだよ」

「この世界って、どの世界？」

ミカが泣きはらした顔を上げた。

「ミタビンがいる、株とか企業買収の世界？ それともアタシのいる芸能界？ それとも、もっと広い意味で？ どのなの？」

敏はこの女と旅行に来たことを後悔し始めていた。サラ金のCMに平気で出演して金を稼いでいるノー天気でナイスバディな女とちよつとバリ島あたりまで行ったら楽しいだろうな、という位の軽いノリで始めたことだったのに……バリ島はまだまだ遠い。入り口の、

飛行機の乗り継ぎのちよつとした観光で、こんなにも躓いてしまっている。

「もちろん……俺たちが生きる、この広い世界のことだよ。なあ、アルディ」

敏はその場しのぎにアルディに救いを求めた。その言葉は嘘であり、誤魔化しだった。ついついいつも部下を励ます為に使っている言葉がポロリとでてしまったのだ。敏が言う この世界 とは彼が住むビジネスの世界のことだった。株価を上げ、会社を大きくする最近はその以外考えたことがない。しかし、急成長を続けた会社にも、最近陰りが見える。行き詰まっている気がしてきて、気分転換の為旅行でもしてみようとミカを誘い出したのだが……

それをこの女は……自分のことばかり考えやがって金を出したのは誰なんだよ、という言葉を危うく敏は呑み込んだ。それを言ったらお終いだろう、ということ位はかるうじてわきまえていた。

「世界は……難しいデスネ」

アルディの言葉が、敏の助け船となった。

「ちよつと疲れたんですね、ミカさん。大丈夫、インドネシアは日本と違うから。そのうち癒されると思いますよ」

アルディはミカに手を差し伸べると、立ち上がるのに力を貸した。

「ありがとう、アルディ」

ミカは立ち上がるとアルディに礼を言った。

「そうね……こっちに来る前、ちよつとイロイロあって……そう、疲れてたかもしれない、アタシ」

「さ、それでは次のパネルに参りましょう」

アルディがミカを元気づけるように、大きな声を出した。

「これはボロブドゥールでいちばん価値のあるパネルと言われています。このパネルだけを見て、帰ってしまう人もいるぐらいです。それだけ、ブッダのありがたい教えが凝縮されたお話です」

「へえ……そうなんだ。何ていうお話？」

ミカがアルディに尋ねた。気持ちがすこし落ち着いたようだった。

「シビ王本生話」

「ほんしょうわ?」

「はい。本生話とは、お釈迦さまの前世の物語が綴られたお話のことです」

そしてアルディはミカと敏に シビ王本生話 のストーリーを語った。

昔インドに、シビという王様がいた。やはり釈迦の前世の姿のひとつである。

ある日、シビ王の宮殿に、鷹に追われた鳩が逃げこんで来た。

慈悲深いシビ王は、鷹に「鳩を逃がしてやってくれ」、とお願いした。

しかし鷹は、

「俺も生きていかなければいけない。その鳩を食べなければ死んでしまう」

と王の願いを断った。そして、

「だがもしその鳩と同じだけの肉をくれるなら逃がしてやっていい」

とシビ王に条件を出した。

「わかりました」

とシビ王は答えると、家来に天秤バカリを持ってこさせた。そして自分の太腿に刀を突き立て、肉を切り取り、鳩の重さと釣り合うように秤に乗せた。

しかし鷹は納得しなかった。

シビ王はそれならと、自分の体をハカリに乗せようとした。つまり、自分の命を投げ出すから、鳩を助けてくれと。

このシビ王の行いを、空から帝釈天という神様が見ていた。帝釈天はシビ王の行いに感激し、腿の肉がえぐれた王の血まみれの体を、元の姿に戻したのである。

アルデイの話聞き終わると敏が言った。「あり得ないな。俺だったら金で解決するね。王様だったら家来に命じて鷹の好きなだけ肉を買って来させればいいじゃないか。あるいは鷹と直接交渉して、金もあげるし肉も好きなだけ食っていいから家来にならないかと誘うとか」

アルデイは憐れむような目で敏を見た。

「この話の重要な点は、自分を犠牲にしてまで鳩を救おうとしたシビ王の心にあるのですよ」

「そうよ。何でもお金で解決しようとするのは間違ってるわ」

ミカが敏を睨んだ。敏は一瞬言い返そうと思ったが口をつぐんだ。くだらない。たかが石のパネルの話じゃないか……

その後三人は、しきたりに従い時計回りに第一廻廊を巡り、再び東側の壁面に戻ってきた。

「さあ、この階最後のパネルを見てください。これも有名なお話です。お金に取り憑かれた若者の、悲惨な末路を描いています」

アルデイは北東に向いた角で立ち止まった。

「ほう。面白そうじゃないか」

それまでアルデイの話にほとんど興味を示さなかった敏だが、腕組みをして一歩前に進み出た。

「何て話なの？」

敏の後ろからミカが尋ねた。

「四門本生話。なんとこの物語は、七枚ものパネルを使って描かれています」

アルデイは答えた。

「長いお話ね。しもんほんしょうわ？」

「はい。しもん、とは四つの門。最後は四つの門がある町が舞台となります」

アルデイはパネルに向き直り、ストーリーを語り始めた。

「インドのある大金持ちの家に生まれたその若者は、成人しても特に何もせず、ぶらぶらと毎日を過ごしていました。そんな息子を見かねて、お母さんは寺に説法を聞きに行くように勧めます」

「そりゃニートだな」

敏が口を挟んだ。

「ニート？ とは」

アルデイが敏に質問した。

「Not in Employment , Education or Training 学生でもなく、職業もなく、かといって仕事を探している訳でもない。働くことを拒否している奴らのことだ。今日本ではけっこうな問題になっている」

「え。日本では、働かなくても生きて行けるんですか？ どうやって？」

アルデイはすこし驚いたようだった。

「その若者と同じだよ。親がかりさ。結局は親のスネをかじってるってこと」

「そうでしたか。それでは、昔も今も大して変わりませんね」

「で、彼はどうしたの？」

ミカがアルデイに話の続きを促した。

「はい。お母さんは寺に説法を聞きに行ったら、褒美としてお金をあげるからと若者に言いました。喜んで彼は寺に行き、説法の間は寝ていましたが、約束通りお母さんからお金をせしめます。悪いことに、息子が変わったとぬか喜びしたお母さんは、若者にかなりの額のお金を渡してしまったのです」

アルデイは二枚目のパネルの前に足を進めた。

「大金を手にした若者は大喜びし、たちまちお金の魅力にとりつかれてしまいました。彼はそのお金を元手に商売を始めます」

「どうせそれは失敗するんだろ？」

話の展開が見えたとはかりに敏は嘲笑った。

「いいえ、とんでもない」

アルディは静かな口調で否定した。

「若者には商才がありました。彼は成功を収め、お母さんから貰ったお金を更に増やしたのです。こうなると彼の欲望は止まることを知りません。外国と貿易して更に儲けようと考えました」

「いよいよ海外進出か」

「はい。ここを見てください」

アルディは二枚目のパネルの左端を指さした。

若者の足元に、両手を地面についてがっくりとうなだれた女性の姿が刻まれていた。

「危険だから外国に行くことだけは止めておくれ、と泣いて頼むお母さんを足蹴にして、一人息子は家を出て行ったのです」

「まあ……なんてひどい」

ミカがパネルを覗きこんだ。敏は何も言わなかった。アルディは三枚目のパネルへ足を進めた。

「若者は船を使い、貿易をして更に大きな儲けを目指しました。ところが海に出て七日目のこと、急に船が動かなくなると、不吉なことに黒い羽根が空から落ちてきて、若者の手に刺さったのです」

「運の尽き、というやつが訪れたんだな」

パネルを見て呟く敏に、アルディが言った。

「そうですね。船乗りたちは迷信深い。彼らは若者を捕らえ、小舟に乗せて海に放り出してしまったのです」

「ふん。うまいことはそんなに長く続かないってことか」

話の先が読めたとはかりに敏が言った。

「ところが。若者を乗せた小舟は、ある小さな島に漂着します」

アルディは三枚目のパネルの、左端まで足を進めた。

「何とそこには、六人の美女が彼を待っていたのです」

「まあ……なんて悪運の強い人」

興味深げにミカがパネルに見入った。そこには、豊かな乳房を惜しげもなくさらした女たちが刻まれていた。アルディは次のパネルに足を進めた。

「当然、その島で女たちと遊んだ若者は、堪能して次の島へ向かいます。するとそこには今度、十六人の美女が」

次のパネルもまた、乳房を露わにした女たちと若者の図柄だった。

「そして次の島には三十二人の美女が」

「なんだ、悪くない話じゃないか」

にやにやして、顎に伸びた無精ヒゲを撫でさすりながら敏はパネルに見入った。

「それで済む訳がないじゃないの。きっと結果は、浦島太郎よ」

ミカは話の展開に不服そうである。

「ウラシマタロウって、何ですか」

アルデイがミカに尋ねた。

「ああ、日本の昔話でね、子供に苛められていた亀を助けた漁師が、竜宮城っていうお魚たちの宮殿に招待されて、その乙姫ってお姫様と毎日飲めや歌えやの楽しい日々を過ごすの。それである日、さすがに里心がついて地上に帰ってみたら、もう何十年も経ってたって話」

「ひどいよなあ。それで乙姫からのみやげに貰った箱を開けたら白い煙が出て、浦島太郎は爺さんになっちまうんだぜ。女の恨みっていうか、独占欲というか……怖いものを感じるなあ」

敏がミカの語ったストーリーにフォローを入れた。

「へえ……面白いお話ですね。でも、若者の末路は、そんなものでは済まなかったのです。更に悲惨でした」

「どうなったの？」

ミカと敏はアルデイに続き、次のパネルの前まで進んだ。七枚目の、最後のパネルだった。

「実は、若者がそれまで遊んでいた女たちは、鬼が化けたものだったのです。いつの間にか彼は、壁に囲まれた四つの門のある町に迷い込みます。実はそこは、ウツサダ地獄 だったのです」

「ウツサダ地獄……」

それは初めて聞く地獄の名前だった。地獄にもいろいろあるんだ

な、と敏は感心した。アルディは敏の顔を見つめながら話を続けた。

「ある種の罪を犯した人間たちはそこで苦しみを受けます。見ると、額に刃のついた車輪が突き刺さり、血を流して苦しむ人たちがそこから中を歩いていました。やがて若者の額にも、鋭い刃で縁取られた車輪がどこからともなく飛んできて、突き刺さります。真っ赤な血が流れ、ミッタビンダカは悲鳴をあげ、大変な苦しみを味わいます。そこへ現れたのが、帝釈天でした」

「出た帝釈天。彼を救いにやって来たの？」

ミカが言つとアルディは静かに首を横に振った。

「いいえ。そうではありませんでした。若者は帝釈天に尋ねます。自分は、どういう悪事を働いたせいで、こんな地獄に落とされたのか？」

「それで？ 帝釈天の答えは？」

ミカは一步前に乗り出した。

「際限のない欲にとらわれ、貪るように金儲けに走る者、富を世の中に還元せず、人間の踏むべき道を守らず、自分のことだけを考えているような者たちは、ウツサダ地獄に落ちるのだ。そのような者たちの頭には、苦しみの車輪が永遠に突き刺さったままとなる」

「お母さんを、足蹴にしたのもいけなかったのかしら……」

ミカが呟いた。

「もちろん、それもあります。自分の身を心配してくれた母親を、足で蹴り倒して家を出るなど許されることはありません。帝釈天は若者を救うことなく、再び天界に帰って行きます」

「つまり、金に取り憑かれた者は救われないということか」

それまでアルディの話にじっと耳を傾けていた敏はやんわりと口を開いた。

「そういうことですね、ミタさん。そしてこの主人公には名前があります。わかりますか？」

「何ていうの？」

「ミッタビンダカ」



「なんだって？」

敏は裏返った声で叫んだ。

「俺の名前は、三田、敏。サトシって字は、ビンと読むこともあるんだ」

「ニツクネームは、ミタビンだもんね」

とミカが言った。

「まいったな……知ってたのこのこと？ アルディは」

敏は両手を腰に当て、石の廻廊に目を落とした。

「お二人の会話を聞いているうちに気付きました」

「それで俺をここに案内した」

「何か、ご縁だと思いましたので」

「まいった」

敏は顔を上げ、アルディを正面から睨んだ。アルディは見つめ返した。

「でもな、アルディ。やっぱり、いずれ二つにひとつだと思うんだ。来世や生まれ変わりや天国や地獄があると思うか、そんなものは全くない方に賭けるかね」

アルディは答えず、目を伏せた。敏はまくしたるように言葉を続けた。

「俺は後の方に賭けるね。人間には今しかない。死んだら終わりだから、今生きているうちが面白ければいいのさ」

アルディがふっと笑った。

「あなた方日本人はそれでいいでしょう。いろいろチャンスもあるようだし、人生を選ぶ幅もある。しかし、ワタシたちは……特にこの国の貧しい連中などには、選択の余地がないのです。現実には悲惨で、よくなる見込みなど、ない。人生を変えるチャンスなどやって来ないし、仕事だって、選べない。ではどうすればいいのか？ 現実には変わらないと分かっている以上、来世の幸福を信ずるしかないでしょう」

ふいに日が陰り、一陣の風が第一廻廊を吹き抜けた。太陽が雲間

に隠れたのだ。

「スコシ涼しくなりましたね」

アルデイが言った。

「さ、では第二廻廊に登りましょうか」

「ああ……そうするか」

我に返ったように、敏が言った。

結局、俺の行く先はウツサダ地獄か

何のためにわざわざくそ暑いこんなところまで来たんだろう、と敏は己の運命を呪っていた。

「あとどれぐらいあるんだっけ？」

とミカが遺跡の上の方を見上げた。

「パネルがあるのは第三廻廊と第四廻廊。その上に仏像と仏塔がたくさん並ぶ、円壇というものがあります」

「まだまだ長い道のりね」

「そうですね。まだ見るべきものは、たっぷりありますよ」

アルデイは先頭に立ち、石の階段を登り始めた。再び太陽が雲の陰から姿を現し、ボロボドゥールに灼熱の日射しが戻ってきた。

2 .

バリ島のデンパサルを経由して、飛行機がジョグジャカルタの空港に到着したのは夜だった。出迎えに来た旅行会社の地元従業員はやたらお喋りな男で、アルデイと名乗った。松村彩と遠山康生はアルデイに案内され、空港ビルを出たところで待っていたトヨタハイエースに荷物を積み込むと、宿泊先である市内のホテルへと向かった。

ノボテルという、近代的な建物だった。古都、と呼ばれるジョグジャカルタとはミスマッチな感じもした。隣には大きなショッピングセンターのビルもあった。

アルデイは二人のチェックイン手続きを済ませると、

「では明日の朝また迎えに来ますので今夜はごゆっくりお休みください」

そう言い残して、帰って行った。

「とりあえず、無事到着したことを乾杯しない？」

部屋に荷物を置くと、彩はウエルカムドリンクのチケットをちらつかせ、康生をホテルのバーへと誘った。

「ああ。いいね」

ぼんやりした感じの康生と手をつなぎ、彩は部屋を出た。

「割と新しくて明るめで、いいホテルじゃない？」

ベージュと薄いオレンジ色を基調としたホテルの廊下を、二人はエレベーターに向かって歩いて行った。

「ああ そうだね」

康生の返事は相変わらず上の空といった感じだ。ここ一ヶ月ほど、ずつとこんな調子が続いている。旅行にでも出れば気分も変わるだろうと、半ば強制的に休みをとらせ康生を連れ出した彩だった。

ジャワ・バリ島6日間の旅 というパッケージツアーである。ジャワ島では古都ジョグジャカルタに滞在し、世界遺産のボロブドゥールとブランパンを一日で見え、あとはバリ島に飛びゆつくりと残りの日程を過ごす予定だった。

二人はバーのカウンターに並んで腰をおろし、バーテンにビールを注文した。

「二人一緒に一週間も休暇とったら、会社にはもう私たちの関係はばれただよね」

「ああ。そうだろうね」

相変わらず康生は浮かない顔だった。

「この頃、疲れてんの？ ん？」

彩は康生の顔を覗き込んだ。毎日、カウンターで接客の仕事をしていることもあって、どんなに疲れていてもとびっきりの笑顔を作ることができる。

「あんな、俺」

康生が思い詰めた表情で彩の顔を見た。

「会社、辞めようと思うんだけど」

「はあ？」

康生の言葉の意味を理解するまですこし時間がかかった。彩は目を瞬かせた。

「もう、やっていけないって気がするんだよ」

いきなり旅の出鼻をくじかれた気がして、さすがに彩も黙り込んだ。ビールに口をつけてみたが、もはやそれがビールの味であるのかすら、彩には判らなかった。

その晩二人は、ツインのベッドに別々に眠った。康生は彩の体を求めてこなかった。彩は二人の将来について不安一杯になってしまい、やはりその気にはなれなかった。

若い二人にとっては、寂しい旅の幕開けとなった。

翌朝

「オハヨーゴザイマス！」

うかない表情でロビーの長椅子に座る康生と彩に比べ、迎えに来たガイドのアルディは相変わらず元気だった。

「それではこれから、チャンディ・ボロブドゥールに出発します

！ よろしくおねがいしまーす！」

「ハア」

「よろしく」

彩と康生は、それぞれ消え入るような声でアルディに返事をした。

「あ。お二人 新婚さんデスカ？」

旅行会社のロゴの入ったトヨタ・ハイエースのスライドドアを開けながらアルディが言った。

「昨夜、ハッスルしすぎて元気使い果たしたんじゃないですか？ さ、どうぞ！」

アルディに促され、二人はハイエースの二列目のシートに乗り込

んだ。

「あのう……私たち、その、まだ新婚さんじゃないんですけど」  
助手席でシートベルトをカチャカチャさせているアルディに向かつて、その後ろに座った彩が言った。

「そうですか！ ハハ、失礼しました。でも、別にその 仲が悪いつてことはありませんね？ 婚約しているとか、そういうことですか？ 恋人同士？ いいですねえ！」

シートベルトと格闘しながら、アルディが言った。

「何だかこのシートベルト、古くって……壊れているみたいです  
ね」

「婚約者が……そこまでもいつてないのかな私たち」

呟くように彩が言った。その言葉が聞こえているのか聞こえていないのか、康生は窓際に肩肘をつき、ぼうつと外の景色を眺めている。

カチャリ、とようやくシートベルトの金具がはまる音がして、助手席のアルディが振り向いた。

「OK！ ノープロブレム。今日はきつといい一日になりますよ」  
彩の目には、振り向いたアルディのことなど全く映っていないかった。いきなり康生に詰め寄った。

「ねえ、私のこと、どう思ってる？」

康生がびっくりした様子で彩の顔を見た。

「あの……ハハ、車、スタートさせてよろしいでしょうか？」

場の雰囲気笑って誤魔化しながら、アルディが二人に尋ねた。

「あ はい、どうぞ」

康生がかるうじてアルディに答え、アルディは頷いて年配のドライバーにインドネシア語で命じ、トヨタ・ハイエースはようやくホテル前を出発した。

「どうしたんだよ急に」

ハイエースの車内 二列目のシートでは、しくしくと無く彩を

康生が懸命になだめていた。

「だって私……康生くんと遠くない将来、結婚するのかなって考えてて……その話も煮詰めようかなって思ってたこの旅行に誘ったのに……急に会社辞めるなんて言い出して」

「だってあれは……その、ずっとこの頃考えていた事でつい」

「何もインドネシアまで来てそんな事言い出さなくなっちゃっていいじゃない」

康生はしばらく黙った。暫くして、

「そうだな。ごめん。俺が悪かった」

と素直に頭を下げてきた。

「せっかくの旅行動もんな。それも、二人で初めて来た海外旅行だ。楽しくやらなきゃ。うん」

康生の言葉は、むしろ自分に言い聞かせているように彩には聞こえた。

「じゃどうするの？ 会社辞めるの、よすわけ？」

彩にそう言われると、再び康生は言葉に詰まった。

「それは」

「ほらそれじゃ楽しくなんかならないじゃない。康生くんが会社辞めて無職になったら、結婚なんかできないもん」

再び康生はしばらく黙った。トヨタ・ハイエースは早朝のジョグジャカルタの町を走っていた。小型バイクに二人乗りしているインドネシア人の若い男女が車に並びかけた。運転する若い男のお腹にしつかりと腕を回して、体をぴったりとくっつけている若い女を見て彩はうらやましくなった。

「わかったよ。会社辞めるの、止めるよ。それでいい？」

沈黙を破って、康生が言った。彩が驚いて康生の顔を見ると、康生は目をそらした。彩は康生の言葉が本物だろうかとその横顔を見つめ続けた。

「わかった。とりあえずは、許してあげる」

待つてましたとばかりに、助手席のアルディが振り返った。

「よかったですね。そういうの、雨降ってナント力が固まる、って言うんじゃないデスカ？」

「ああ、雨降って地固まる、か　よく知ってるね、日本のことわざを」

康生がアルデイの言葉に反応した。

「ワタシ、そういうコトワザが好きで、いつもノートに書いて覚えてます」

とアルデイはボロボロになった古いノートを二人に見せた。

「ジ、とは何の意味デスカ？」

「地、は地面の地だね。土のことかな」

「変ですねえ。雨が降ったら土はドロドロになって流れ出すんじゃないですか？　少なくともインドネシアではそうなんです」

「そう言われてみりゃ、そうか」

「その後日が照って乾いたら、前よりしっかりと固まる、ってことじゃない？」

アルデイの明るさに救われた気がして、彩も会話に加わった。

「じゃあ、雨の強さによりますね。あんまり強いと、どうしようもない」

助手席のアルデイが言った。

「そういう時は、どう言うんですか？　何か、コトワザは無いんですか？」

「覆水盆に返らず」

その声に、みんなギョツとして運転手を見た。

「何だ、日本語、話せんの？」

と康生が運転手に尋ねると、

「スコシ、です」

前頭部のはげ上がった年配の運転手は、ハンドルを握ったまま、

ニコニコしながら答えた。

「アルデイさんよりは下手です」

「えーでも覆水盆に返らず、ってちょっと意味違うかも」

と彩が言った。

「そうですか。日本語、難しいです。どういう意味ですか」

「一度してしまったことは取り返しがつかない」

「う」

彩の言葉に、康生が反応した。凍り付いた表情で、彩の顔を凝視している。

「どうしたの」

脂汗でも流しているかのような康生の顔を見た彩が言った。

「あ……いや。そんな意味だったのかって、ちょっと、ビックリしたと言っか……」

ことわざの話題は、それで打ち切りになった。トヨタ・ハイエースはのどかなジャワ島の田園風景の中を、ボロボドゥールに向かって走り続けた。

遺跡に着く頃には、既に気温は三十度をはるかに越えていた。

「ヤスオさんとアヤさんは、同じ会社で働いてますか？」

石段を登り、第一廻廊に辿り着いた所でアルディが言った。

「そうなんですよー」

と彩が答えた。車の中にいる時から、アルディとの会話はもっぱら彩が引き受けていた。

「何の会社ですか」

「えーと……」

一瞬ためらい、彩は康生の顔を見た。何を考えているのか、その表情は読み取れなかった。

「あの、消費者金融というか」

彩が言うと、

「サラ金です」

と康生がアルディにはっきりと言った。

「サラキン？」

「人にお金を貸して、利息をとって儲ける仕事ですよ。ちょっと



高めの利息をね」

康生の顔に、自虐的な笑みが浮かんでいた。

「それでは、困った人を助ける仕事ですね？」

実情を何も知らないアルデイが尋ねてくる。

「まあ……そう言えないこともないんだろうけど」

「そうよ。お金に困っている人に、一時的にお金を貸してあげて  
るんだから、別に誰かに恥じることはないのよ」

自分に言い聞かせるように彩は言った。

「でもなあ……本当にこれでいいのか？　と思うことはないか」

康生が彩の顔を見つめた。彩は言葉に詰まった。

「そうやって、いつも悩んで、本当の道を探していた方のお話が、  
このパネルの中にありますよ」

見合っただまま固まってしまった彩と康生に、アルデイが声をかけ  
た。

「ついて来てください」

三人は作法通り、ボロブドールの第一廻廊を時計回りに、反対  
側の西門まで歩いた。立ち止まった所でアルデイが、下側のパネル  
を指さして、

「求法太子本生話です」

と言った。

「ぐぼうたいしほんしょうわ？」

どういう字を書くのか見当もつかず、彩がアルデイの言った言葉を  
繰り返した。

「求法太子の求法とは、法を求める。太子は、王子様。つまり、  
いつも真実を探していた王子なんですね」

「愚図のグ、じゃないのね。よかった」

「グズのグ、とは何ですか？」

「それだと、愚かな、っていう意味になるのね。愚法だと、バカ  
な、間違った道ってことかしら」

「なるほど……日本語は、面白いですね。ワタシ、ノートに書いたりするときマス」

アルデイが尻ポケットからノートを取り出し、ボールペンで書き込んだ。

「えーと、グホウタイシのグ、が愚かなグ、なら、バカ道王子」

アハハ、と彩が笑ったが、康生はにこりともせずパネルを見つめていた。

「それで？ 彼の求めていた真実って見つかったの？ どんな話なの？」

パネルを見つめたまま、康生が言った。

「太子は大勢のお坊さんに贈り物を与え、ひたすら真実を求め続けました。でも、なかなか答えは見つかりませんでした」

アルデイが、パネルの前を歩きながら語り始めた。

「太子の余りの熱心さに心をうたれたのが、帝釈天という神様です。帝釈天は、太子の情熱が本物かどうか試してやろうと、一人のお坊さんに変身して、太子の住む宮殿の門を叩きます

バラモン僧に化けた帝釈天は言いました。

「私は真実の教えを知る者である。誰か聞きたい人がいれば、すぐにでも教えてやろう」

その言葉を聞き、求法太子は帝釈天が化けたバラモン僧を早速宮殿に招き入れます。

「その教えとはどのようなのですか。もし聞かせて貰えるなら、私は財産も、妻や子も、いやこの命さえ投げだしましょう」

「それではここに穴を掘り、薪でいっぱいにして火を起こしなさい。その火の中に、あなた自身の体を投げ入れるなら、私は真実を教えましょう」

太子は頷き、家来に命じて地面に大きな穴を掘らせ、沢山の薪を入れ、火をつけます。そしてバラモン僧に向い、

「真実を求める為に命を捨てるのは惜しくない。ただ、今火の中に飛び込んでしまつては、あなたの教えを聞くことができない。飛

び込む前に教えて貰いたい」

と言いました。

「よろしい。では聞くがよい」

バラモン僧は語り始めました。

「常に慈悲みをなす事です。怒りや恨みは捨て、大きな慈悲をもつて人を憐れみなさい。そして心が傷ついた時には、思いつ切り泣くことです。雨のように、泣くことです」

その言葉を聞くと、太子は、

「わかりました。ありがとうございます」

とすぐさま火の中に飛び込んでしまいました。しかし、不思議なことに、燃えさかる火の中でも太子は焼け死ぬこともなく、蓮華の上に座っていて、目の前には帝釈天がいたのです。

「太子よ。なぜそこまでして真実の教えを求めるのだ？」

と帝釈天は太子に問います。すると太子は、

「世の中の、苦しむ人々を救い出したいのです」と答えたのです。」

アルディは彩と康生に頭を下げた。

「ご立派」

彩が拍手した。

「真実の為には、自分の命をも投げ出す。それがこのお話の、素晴らしいところですよ」

「こんな話がパネルの中にあるなんて知らなかったな」

感心したように康生が言った。

「仏教には、捨身 という考え方があるんですね。自分を捨て、

我が身を犠牲にして誰かの為になることです」

「アルディも、仏教徒なの？」

彩はアルディに尋ねた。

「いいえ。残念ながらイスラム教徒です。インドネシア人の大半は、イスラム教徒なんですよ」

「へーえ、そうなんだ」

「でも、捨身の心はよくわかります。ワタシたちも、アツラの為に命を投げ出すなら、死んでから天国に行けます」

アルディは先に立って歩き始めた。

「さ、もう一回りしてみましよう。第一廻廊には、こうした捨身のストーリーがまだいくつもあるのです」

三人は第一廻廊を一回りして、再び東門の前を通り、南門を過ぎた所で立ち止まった。

「大猿本生話、という有名な捨身のお話です」

アルディは、ボロボドゥールに背を向け、外側の廻廊の壁に刻まれたパネルを指さした。

「物語の主人公は大きな猿、マハーピカでした。マハーピカは、八万匹という大きな群れを率いるリーダーだったのです。

猿たちは川の上流に住み、マンゴーを主食としていました。

ある日川に落ちた一個のマンゴーが、偶然下流に住む人間の王の口に入りました。そのあまりの甘さにマンゴーのとりこになった王は、更なるマンゴーを求めて上流へ部下を率いて遠征します。

すると、マンゴーの大木には猿たちが群がり、実は瞬間に減っていくではありませんか。あせった王は部下に、

「猿どもを射殺せ」

と命じました。

弓をつがえる王の家来たち。危険を察した猿のリーダー、マハーピカは木のつるを自分の腰に巻き付け、対岸からマンゴーの木にジャンプすると仲間たちに叫んだのです。

「早く、私の背中を通り、つるを伝って向こう岸に逃げるんだ！さもないと人間どもに殺されてしまうぞ！」

猿たちは、マハーピカの背中を踏みつけ、つるを伝って続々と対岸へ避難を始めました。全ての猿が渡り切る頃にはさすがにマハーピカは疲れ切り、力尽き、下へ落ちそうになったのです。

自らを犠牲にして仲間を助けたその姿に、人間の王は感動し、  
「あの猿は殺してはならん」

と部下に命じました。王の部下たちにより、下に降ろされたマハーピカは手厚い看護を受けたのですが、もはや手遅れでした……」

アルディの話聞き終わると、康生がポツリと言った。  
「俺たちの仕事は、八万匹の猿を、逆に地獄に送っている気がするな」

「そんなこと言っただけ……他に就職できなかったんだもん、しょうがないよ」

彩の表情も暗くなった。二人の雰囲気が悪くなってしまったことを察したアルディは、

「ささ、それでは次のパネルを見てみましょう。今度の話は、象が主人公です」

と次のパネルへ二人を案内した。

「昔、森に一頭の白い象が住んでいました。ある日象は、森のはずれの荒野で道に迷い、困り果てている人間たちの声を耳にします。声のする方角に行ってみると、何と七百人もの人間が、道に迷い苦しみを訴えていました。彼らは喉が渇き、食べ物もなく飢え、善因がひどく疲れているように見えました。」

「どうしてあなた方はこんな荒野でさまよっているのか？」

と象は人間たちに尋ねました。  
すると人々は、

「故国の無慈悲な指導者により、住む場所を追いつけられ、道をさまよい続けました。もはや食料も底を尽き、水も無く、みんな疲れ切ってしまったのです」

と象に打ち明けたのです。

象は彼らの国の指導者とは違い、慈悲深い心を持っていました。人間たちを助けてやろうと心に決めます。

「あの山のふもとに、蓮華の咲く池があります。まずそこへ行くことです。水がたっぷり飲めますよ」

象は人間たちに池までの道を教えました」

「こういう物語って、何かの比喩なんだよな、きっと」

アルデイの話に耳を傾けていた康生が言った。

「無慈悲な指導者に居る場所を追われた人々なんて、俺たちの国でもさらにある話じゃないか」

「うちの会社にお金を借りに来る人たちの中にも、そういう人、いっぱいいるわ」

と彩が言った。

「ね、アルデイ、この話、それで終わりなの？　続きは？　どうなったの」

「悲しい続きがあります」

とアルデイは目を伏せた。

「象は先回りをして、高い崖の上に辿り着きます。そして、そこから、人間たちが通るであろう道の上に身を投げて、死んだのです。象は飢えた人々のために、死んで自ら食料になろうと決めたのです」

アルデイは話を結んだ。

3 .

プールサイドのデッキチェアに腰かけた三田敏は、浮かない顔で三分の一ほどビールの残ったグラスを口に運んだ。ビールはぬるくなっていた。もはや　旨い　という段階は過ぎている。味もよくわからなくなっていた。それでもビールを口に運び続けるのは、他に何もすることが無いためだ。

一人泳ぎ続けていた山岸ミカが、ようやくプールから上がってきた。濡れた髪をバスタオルで拭きながら、敏の隣のデッキチェアに腰を下ろした。

「ああ。気持ちいい」

真っ赤な水着を着たミカは背伸びをすると、デッキチェアに仰向けに寝ころんだ。切れ込みが深い胸元から露出した、弾力のありそうな豊かな胸のふくらみがゆさゆさと蠢いた。チクショーいつにな

「だったらこの女やらせてくれるんだよ、このホテル一泊幾らすると思  
ってんだ……と心の中で毒づきながら、敏はわざと弱々しい声で、

「ミカちゃんは元気だな」

と、言った。

「だってこのホテル最高じゃない、プール付きの、スイートル  
ームって気に入ったわ。誰の目を気にすることもないし、ごちゃご  
ちゃしてないし。究極の隠れ家 って、本当だと思うな」

二人がこのホテルに滞在して、既に三日が過ぎていた。アマンダ  
リ。バリ島南部の山間の村、ウブドの郊外にある高級リゾートホテ  
ルである。世界中に 究極の隠れ家リゾート を建設中のアマンダ  
グループを代表する存在と断言している。

「そりゃそうだろう。いちおう一泊千ドルするスイートだから  
ね」

「あ、お金の話は言いつこなし！ そんなこと言われたらミカ不  
機嫌になっちゃうよー。だってミタビン、どうせ大金持ちなんだか  
らしいじゃん。こういうのって、会社の経費で落ちるんでしょ」

「まあ、結局はそういうことになるんだろうけど……」

敏は言い淀んだ。アマンリゾートまで奮発したのに、結局この女  
とは一発もやることなく日本に帰ることになるのだろうか……

「なあ、ミカちゃん。今晚はパツと飲みに行かないか？」

ある考えがひらめき、敏はミカに提案した。

「あ、いいねその考え。パツとするの、ミカ、大好き！」

「じゃあ、クタビーチのクラブにでもくり出そう。あそこは賑や  
かだよっても」

「ビーチのクラブ？ いいないいなそれ」

「よし。決まりだ。じゃ早速、フロントに電話して車を手配しな  
きゃ」

計画通りにことが運べば、何とかなるだろう

思わず笑みがこぼれた。敏はデッキチェアから立ち上がり、電話  
をするためスイートルームの中へと向かった。足取りは軽かった。

ジャカルタ発デンパサル行きのカルダ・インドネシア航空のジェット機は、バリ島に向けて順調に飛行を続けていた。客席は三分の入りといったところ。つまり、からからである。イスラム原理主義者による爆弾テロが二度も起きてから、バリ島に向かう観光客は激減していた。遠山康生と松村彩が座るエコノミークラスの席も、前後に客はいなかった。

「皮肉だな。テロのおかげでゆったり旅ができるなんて」

窓外の雲を眺めながら、窓際の席に座る康生が言った。

「目のつけどころが良かったでしょ、私」

隣の席から、彩が腕を絡めてきた。

「ツアー料金も、格安だったのよ」

「わかったよ。いい旅行になるさきつと。三度目のテロさえ起きなけりゃね」

康生は彩の方に顔を向けて笑った。バリ島に近づくにつれ、少しずつ、明るさを取り戻しているようだった。

「縁起でもないこと言わないでよ全く」

すこし新婚気分でいる彩は康生に甘える仕草でもたれかかった。

「冗談だよ。いくら何でも三度目はないだろう」

康生は彩の髪をなでながら、

「それにしてもボロボロウールは割によかった」

と呟いた。

「そう？　ずっと考え込んで、暗い顔してたからそうは見えなかったけど」

冗談めかして彩が言った。

「うん。あることが引つかかってさ」

「何よ」

彩は身を起こした。



「悩みがあるなら、隠してないで言っちゃいなさいよ」

彩は辺りを見回した。

「どうせ席もがらがらなんだし」

「うん……」

それでも康生はためらっていた。

「実は……」

彩は身を乗り出した。

「やつぱり、止めとく」

康生は足元に目を落とした。

「何よそんなの……やだなあ」

「話せる時が来たら話すから。必ず」

康生は彩と目を合わせようとはしなかった。

「そう。わかった。少し寝る」

彩は康生から顔をそむけ、シートにもたれかかると寝る体勢に入ってしまった。

「あのさあ、自分を犠牲にする話……あれはいいよね」

彩の背中に向かって、康生は語りかけてみたが返事は戻ってこなかった。

「いや……俺、そんなことが言いたかったんじゃない。俺、山岸ミカにブラックメールしてたんだ」

彩がパツと体を起こし振り返った。

「何ですって？」

「だから……山岸ミカにブラックメールを出してたんだよ」

「脅迫ってこと？」

「そこまで深刻なレベルじゃなくって……ほら、彼女がうちの会社のCMに起用されてから、若い奴らの借り入れが増えただろ？」

彩は何も言わず、告白を続ける康生を見守っていた。

「借金する奴の数が増えただけじゃなくて、夜逃げする奴や、自殺する奴の数も増えたんだ。そのことを、教えてやったただだよ」

気弱そうな微笑みを浮かべ、康生は彩の顔を見た。

「間違ってたかな、俺」

「……わからないわ」

康生の目を見つめたまま、彩が答えた。

「俺の担当してた若い奴が自殺したんだ。借入額は大了たことなかったし、それほどひどい取り立てを仕掛けたわけじゃない。なのに死んだ。アパートで首吊って……遺書には、俺を恨む、と書いてあったそうだ」

「あたしもそのお客さん相手したかもしれない……覚えてるわ、何となく。髪の毛長い、気弱そうな人だったよね」

「ああ、確かに。そんな感じだった」

「そう言えば、山岸ミカのファンだって言ってた。CMを見て、こちらに決めましたって……」

「そうか」

「そしたら、遠山さんのしたことって、間違ってたかもしれないけど……」

「そうだろうか……」

「でも、本人に……山岸ミカにそのメッセージは確実に届いているの？」

「たぶん。本人の郵便受けに入れたから」

「どうやって彼女の家を突き止めたのよ」

「本社の宣伝部に元同僚がいる。そいつにCMの撮影スケジュールを聞き出した。撮影が終わるのをスタジオの前で待って、車で後をつけたんだ」

「それじゃあこちらの身元はばれないでしょうけど……内部事情に詳しい人がやったというのは分かっちゃうかも」

「そうだね」

それから二人は、暫くの間黙り込んだ。シートベルト着用のライトが点灯し、客室乗務員のアナウンスが、飛行機が着陸態勢に入ったことを告げた。二人はリクライニングしていた背もたれを元の位置に戻し、のろのろとシートベルトを装着した。

バリ島の、西南のはずれにあるクタ・ビーチ。南に向かって島は漏斗のようにすばまっていき、南端のバドゥン半島につながっている。その、漏斗の先端の左側にクタ・ベイがある。地形のためかこの湾にはよい波がたち、一九六〇年頃からサーファーが集まるようになった。島の西側に位置し、サンセットが信じられないほど美しいことも相まって、観光地として発展し始め、今ではバリ島最大の観光地となり更に拡大を続けている。元々が、自由を愛するサーファーが集まるような場所だから治安はよくない。ドラッグや、幻覚をもたらしキノコ、マジック・マッシュルームなどが蔓延していたし、観光客の増加にともない悪質な物売りやひったくりも横行するようになった。

それでも、人々はこのビーチに集まってくる。刺激を求めて。好奇心から。それが、危険を伴うことには全く無頓着に。

確かに、クタ・ビーチの夕焼けは、この世のものとは思えないほど美しい時がある。柄にもなく、ああ、このまま時間が止まってくれたらいいのに…… と思い、そのことを隣の席に座る山岸ミカに素直に打ち明けたところ、「アタシもそう思ってた」という返事を貰い今夜こそはうまくいきそうだと三田敏は思わず拳で手を打ったものだった。

「さあ、これからミカちゃんを、スペシャル・ディナーにご招待するよ」

太陽は完全に水平線の下に沈み、空を支配するのはオレンジの光からダークブルーに6行しつつあった。まだ少し未練ありげなミカを促し、敏は夕日を眺めるためにリザーブしていた海沿いのレストランを出た。大通りを右に折れ、更に左の狭い道へ、ミカの手を引き足を踏み入れた。

「ちよつと、怖いんじゃない？」

屋台の並んだ路地を通り抜ける時、ミカは不安の声を漏らした。

「大丈夫。ロケハン済みだから」

勝手知ったる様子で、敏はずんずんと暗い方へ入って行く。暫く歩くと、路地の奥の暗闇の中に煙草の火がぼつんと見えた。

「ハロー。ワヤンくんかい？」

敏がおっかなびつくり闇の中に声をかけた。

「ヤー。ウエルカム」

闇の中から、長髪を金色に染めたバリの若者がヌツと現れた。キヤツ、とミカが小さな悲鳴をあげる。

「大丈夫。彼は友達だから」

敏はミカの手を握る自分の手に力を込めた。

「三田さん。用意はできています。どうぞこちらへ」

金髪の若者　ワヤンは建物の中へ入り、二人を手招きした。

内部は薄暗く、ワヤンは入り口に置いてある燭台のろうそくに火を点すと、「こちらへどうぞ」と先に立って歩き出した。木造の古びた建物で、闇の中には香の匂いが漂っていた。左右には幾つものドアがあり、たくさん的小部屋に仕切られていることが見てとれた。「ねえ、ミタビン。ここは一体何なの？」　後ろから敏の肩に掴まって歩いていたミカが小さな声で尋ねた。

「今にわかるよ。後のお楽しみ」

「こちらの部屋へどうぞ」

ワヤンが奥のドアを開け、二人は中に入った。狭い、六畳ほどの個室で、中央にはテーブルがあり、椅子が二脚。テーブルの真ん中にはやはり燭台があり、ワヤンは自分のろうそくの火をテーブルの上のろうそくに移した。

「さ、どうぞ」

ワヤンは自分の燭台をテーブルの上に置き、椅子を引いてミカを座るように促した。

「お飲み物は何にしますか」

ミカはワヤンには答えず、

「レストランなの？」

と敏に向かつて尋ねた。

「ああ。そうだね。かなりスペシャルなレストランなんだけど。  
オムレッツ料理がメインなんだ」

「何だ、オムレッツ専門店？」

ミカは席につくと、

「じゃあアタシ、白ワインを」

とワヤンに言った。

「俺はビールだな」

「かしこまりました」

ワヤンは一礼すると出て行った。

「よほどおいしいオムレッツなんでしょうね」

照明はろうそくの灯りだけ。いかにも怪しげな店である。もちろん看板も出ていない。なる程こういうことだったのか、と敏は妙に納得しながらミカの向いに腰を下ろした。

「そうだよ。とびきり質のいい、マジック・マッシュルーム入りのオムレッツだ」

牛糞の上に生えるという毒キノコの一種、マジック・マッシュルームは、幻覚を引き起こしたり気分をトリップさせたり的作用をもたらず。かつてはバリ島の名前を世界に知らしめた要素のひとつだったが、やがて粗悪品が出回るようになり、死者も出るに及んで遂には麻薬の一種としてインドネシア政府はこれを禁止するようになった。しかし、島全体に自生していることから、なかなか取り締まるのは難しいとされている。法的に禁止されたことで、こうして裏の世界では上質のものが高値で提供されることになった。敏はホテルの従業員にしかたま金を握らせ、安心できる マジック・マッシュルームレストランの予約にこぎつけたのである。マジック・マッシュルームの効能には、セックスも含まれていた。

「気持ちが高ぶって、極上のセックスができることをお約束しますよ」

予約の電話を入れた時、あの金髪の男　ワヤンが言ったことを  
思い出し、敏はほくそ笑んだ。

「でもそれって危くない？　副作用とか」

もつともだ、と思われる質問をミカが投げかけてきた。

「大丈夫大丈夫、だって昔は合法だったんだから。粗悪品が出回  
ったから禁止になったんであつてね。ここのは最高級だから」

自信たっぷりな敏が話していると、

「失礼します」

とワヤンが飲み物を乗せたトレーを持って入ってきた。

6 .

波の穏やかなこのビーチで一日を過ごしていると、乱れていた心  
も次第に落ち着きを取り戻しつつあるかに思えた。

このまま永遠にここに止まっていられないものか……

木でできた大きな傘のような日よけの下の長椅子に寝そべり、遠  
山康生は目を閉じた。宿泊しているバリ・ハイアットの前に広がる  
ビーチはプライベートで、外から物売りが入って来ることはない。  
インドネシアに来てから、ボロブドゥールでもプランバナンでも常  
に付きまとわれていた物売りから解放されて、康生は心からホッと  
していた。あえて難点を言うなら、やたら日本人が多いことだった。  
異国情緒がすこし削がれる。それもしくは、このホテルに日本人が  
常駐しているのだから無理からぬことではあるのだが。

ま、英語も話せない俺みたいな人間には気が楽だ

寝そべる長椅子の横を通り過ぎていく年とった日本人観光客の喋  
る日本語にぼんやりと耳を傾けながら、康生は浅い眠りに落ちてい  
った。

「サヌールにして、正解だったわ」

その声に目を覚ました。隣の長椅子に、いつの間にか松村彩が腹  
這いに寝そべっていた。

「マッサージに行ってきたの？」

康生が尋ねると、

「ええ。もう最高だったわ。遠山さんも行ってくればいいのに」

「そうだね。ま、気が向いたらね」

「ね、今晚なんだけど、クタに行ってみない？ ちょっとこづ、のんびりしているのにも飽きてきたし」

「いいよ。クタって、あの　テロがあつたところだね」

「二回もあつたんだから、三度目はないわよきつと」

「まあ、そうかな」

答えながら康生は、胸の中に黒いもやもやとした雲のような不安が湧き上がってくるのを感じた。しかし、自分が彩の提案を断らないうしろという事も分かつていた。主体的に動くことはひどく面倒だった。今回は彩が計画してくれた旅行だ。彩が好きなようにすればいい……

サヌールからクタまでは、三十分もかからなかった。バリの闇は深い。市街を抜けると、タクシーは濃密な暗闇に包みこまれた。それだけに、クタの賑やかな市内の灯りが見えてきた時、彩は正直ホツとした。タクシーの中で、康生とはほとんど会話を交わしていなかった。ただ手を握り合っていた。

「嫌な予感がする」

タクシーに乗り込む時、確かに康生がそう呟いたような気がしたのだが、そのことは確かめてはいなかった。インドネシアに到着して以来、康生には気を遣いっぱなしだ。

彼を力づけるために誘ったんだから、仕方ないか

自分には言い聞かせてはいるのだが、そろそろ押さえつけていたものを発散させたかった。

今日は何だか、思いつ切り騒ぎたい感じ

クタ・スクエアでタクシーを降りた彩は、最初の目的地であるハードロック・カフェに向かって海沿いの道を歩き始めた。気分が浮

き浮きしていて、足取りが軽くなっていた。

十メートルも歩かないうちに、首にチェーンをじゃらじゃらと巻き、髪を脱色した地元の若い男が話しかけてきた。

「日本人ですか？ どこから来たの？」

連れがいるのになぜ？ と後ろを振り向くと、すぐ後ろについてきているとばかり思っていた康生は、まだタクシーが止まった辺りでうろろしている。

「もう！」

彩は猛然と引き返した。

「チョットおねーさん、無視しないでボクと三十分ぐらいイイコトして遊ぼうよ！ ねえ何で無視するの」

地元の若者はしつこく追いかけて来る。

「ねえちよつと、ナンパされちゃったじゃないの」

康生の所によりやく引き返した彩は、強引に腕を組むと、

「さ、行こう」

と地元の若者を無視したまま、ハードロック・カフェの方へ引き返した。恨みに満ちた暗い目でじっと見送る若者の視線を痛いほどに意識しながら……

「どう？ ハイになってきた？」

個室の暗がりの中で、三田敏は山岸ミカに囁いた。テーブルの上のろつそくは、三分の一ほどになっている。

「うん何だか……気持ち、いい感じ」

唇を半開きにしてミカが答えた。目はとろんとし、涙で濡れたように光っている。よし機は熟した、と敏は鼻息を荒くした。自分のオムレツには、マジック・マッシュルームは少なめに入れてもらった。そのように細工したのだ。建物の奥には、更にスペシャル・ルームが 防音のベッドルームがある筈だった。

「さ、ここは出ようか」

敏は立ち上がり、ミカに右手を差し出した。ミカは敏の手を取っ



て、ふらふらと立ち上がった。

奥のベッドルームに入り、ミカをベッドの上に横たわるように誘った。ミカはされるがままだった。半開きの唇で薄く笑いながら、濡れた目で時おり敏の顔を見た。現地で買ってやった、鮮やかな色彩のワンピースに包まれたその肉体がベッドの上でくねくねとうごめいていた。敏はミカのワンピースの肩紐に手をかけた。ミカは嫌がるそぶりも見せない。右、左と肩紐を外し、ワンピースを下にずり下げた。メロンを二つ並べたような、と形容される、大きくて形の良い乳房の上半分が剥きだしになった。肩紐がないタイプのブラジャーが、下三分の一、乳首の上を覆っている。敏は思わず息を飲んだ。両手をブラジャーの上に伸ばしていく。その時、

ドッ、カーン。

衝撃が先に来た。音は後だったような気がする。後ろから突き飛ばされるようなショックを受け、敏はミカの下腹部に頭を突っ込むような格好で前のめりに倒れた。

「キャッ！ 何するのよ！」

催眠術が解かれたかのようにミカが正気に戻り、わめきちらした。

「この変態！」

自分の下腹部の上に乗っかる敏の頭を拳でぼこぼこに殴りつける。

「ち、ちよつと待ってくれ、何が何だか」

敏は転がってミカの攻撃から逃れ、ベッドの下に尻餅をついた。

硝煙の匂いが漂ってきた。ミカはワンピースの肩紐を引っ張り上げ、体勢を整えた。ドアの隙間から煙が入り込んできた。

「大変だ。火事かもしれない」

敏が立ち上がろうとしたその時、ドアが開いた。血だらけで、目をカッと見開いた男が現れた。ボーイのワヤンだった。金髪の半分は血で真っ赤に染まっている。

「キャーッ！」

ミカがありつたけの声で悲鳴をあげた。

「ウワァーッ」

つられるように敏も叫んだその時、ワヤンは前のめりにどうつと倒れた。その後ろにもう一人の人影があった。人影の背後では、確かに火災が起きていた。人影が一步前に進み出た。背後の炎が部屋の中の鏡に当たって照り返し、その顔を闇の中に浮かび上がらせる。

「アルディ……？」

ミカがため息のような声を漏らした。

敏は、目をこらしてその男の姿を見つめた。確かに、ボロブドゥールのガイド、アルディに似ていた。しかしどこことなく印象が違う。ようやく気付いた。アルディは、武装しているのだ。左手に短い機関銃を持ち、右手にはサバイバルナイフ、そして肩には弾倉をたすきがけにしている。

「お前本当にアルディなのか……」

敏は、やつとの思いで絞り出すように言った。

「誰だ。何で俺を知っている」

男の返事は確かに日本語だった。そして部屋の中に進み出た。アルディに間違いない。右手のサバイバルナイフから、血が滴り落ちていた。

「何だ。あなた方だったか。ミタビンさんとミカさん」

アルディは敏とミカの顔を交互に見た。その目はボロブドゥールのガイドをしている時とは違うものだった。そして全身から殺気としか呼びようもないものを発散させていた。ガイドをしている時の、あのひょうきんなアルディはそこには居なかった。

「アルディ、お前がこの男　ワヤンを殺したのか」

床に腰を抜かした状態のまま、敏はアルディに尋ねた。

「こんな墮落をまき散らすような人間は、死んで当然だ」

感情の交じらない声で、アルディが答えた。

「ここにはもうじき、爆弾を積んだ車が突っ込んで来る。その前に逃げるがいい」

アルディは二人にそう言い残すと、廊下の暗闇の中へ踵を返した。

「すまん、ミカちゃん」

敏がミカに声をかけた。

「手を貸してくれ。腰が抜けて動けないんだ」

思いつ切りはめを外して楽しもうと思つて来たのに、ハードロック・カフェの中に入ってから松村彩はどんどん気分が悪くなつていった。

「ちよつと私……外の風に当たつてくる」

彩とは対照的に、ハードロック・カフェに入ってから結構その雰囲気を楽しんでいる風な遠山康生に断つて、彩は店の外に出た。

店の中の、大音量から解放されたせいか、外に出ると少しだけ気分がよくなったような気がした。潮の香りを含んだ外の空気を深呼吸している、自分を見つめる視線があることに気が付いた。その気配を辿つていくと、ビーチを背にした暗がりの中に、先刻ナンパをしかけてきた脱色した髪の若者が立っていた。若者が彩に近付いて来る。

「どう？　気分悪いだろ」

当然だ、と言うばかりの口調で若者が言った。

「さつきあんたに、ブラック・マジックかけたんだよ」

「ブラック・マジック？」

「そうさ。バリ人を馬鹿にして、口もきかないような外国の女には、ブラック・マジックをかけてやるのさ」

「どういうことなの？」

「不幸が襲いかかりますように。気分が悪くなりますように。楽しくなくなりますように。そういう呪いを、かけてやるんだ」

「勘弁してよ。私……別に悪気があつた訳じゃないのに」

「ブラック・マジック、解いて欲しい？」

若者が更に一步、彩に近付いた。

「そりゃあ……そうだけど」

「じゃボクと楽しいことしよう」

若者が彩の右手首を掴んだ。

「やめてよ。嫌だ」

彩は抗った。だが若者の力は強かった。引き寄せられ、抱きしめられた。ココナッツオイルの匂いが、むせかえるように迫ってきた。

「やめて！ 助けて！ 誰か」

「ヤメロ」

明らかに、日本人が喋ったものではない日本語が聞こえてきたと思っただけ、若者の力がふっと緩んだ。彩は若者の腕の中からずりりと抜け出した。若者は、邪魔を入れた人物に、インドネシア語でくっつかかった。激しい言葉のやりとりがあった後、若者は相手に殴りかかった。その瞬間、パン、と乾いた音がして一瞬中に浮き上がったように見えた若者がそのまま力無く俯せに路面に倒れ、ひくひくとけいれんした。若者の腹の下からどす黒い血が流れ出し、血だまりを作り始めた。恐怖にかられた彩は、おそろおそろ若者を倒した相手の顔を仰ぎ見た。

「アルディ……？」

「ブラック・マジックには、注意した方がいいですよ」

人をたった今殺したとは思えない穏やかな表情でアルディが言った。肩から軽機関銃と弾倉をたすきがけにし、右手には拳銃を握っていたが、それはまぎれもなくボロボロのあのガイド、アルディだった。

「ブラック・マジックって、本当にあるの？」

死んでゆく人間を目の前に、何と奇妙な質問をしているのだろうと思いつつ彩は尋ねた。

「インドネシアでは、常識です。それを打ち消すための、ホワイト・マジックも盛んですよ」

アルディはけいれんもなくなった脱色した髪のを若者を乗り越えようと、ハードロック・カフェに向かって歩き始めた。

「ねえどこに行くの」

「墮落した場所に、罰を与えに行きます」

「アルディ、あなたテロリストだったの？」

「それはあなた方の価値観です。ワタシたちはそんな風には思っています」

「まさか……あなた、自爆テロを」

その時、ハードロック・カフェの入り口から康生が出て来た。足元がふらついている。かなり酔っていた。

「おい彩ちゃん。置いていかないでくれよー。あれ？ アルディじゃん。何でここに？」

康生がアルディのつま先から顔までをじろつと眺めた。

「そんなテロリストみたいな格好してさあ。どうしたのよ一体」

「康生さん！ 彼 冗談じゃないのよ。これからハードロック・カフェに、自爆テロしかけようとしてんの」

「はあ？」

アルディを挟んで、彩と康生がほぼ等間隔で向かい合った。

「まじ……？ アルディ」

「どいて下さい。これはワタシに与えられた使命なのです」

「アルディを止めてよ康生さん！」

彩は叫んだが、アルディは歩き始めた。康生はアルディが進むにつれ、後じさりしていった。

「よせアルディ、死んで花実が咲くものか」という諺があるぞ」

「どういう意味ですか」

「死んだらもう、何も成し遂げることができないってことだよ！」

「ワタシは死ぬことでこの墮落の城を破壊し、生まれ変わって天国へ行くのです。そこをどきなさい」

アルディは歩調を緩めず、康生はアルディに道を譲った。

「何とかしてよ康生さん！」

彩が駆け寄り、康生にとりすがった。

「おいアルディやめろ！」

「お願いアルディ、やめて！」

後ろから男女の声がして彩が振り向くと、日本人の中年の男と若い女がよろよろと走って来るのが見えた。

「アルディ、お前のミツタビンダカの話は最高だったぞ。俺、心打たれたよ！　またガイドしてくれよ」

「自己犠牲の話は身にしみたわ！　でも今あなたがやろうとしていることは、違うんじゃないの」

彩には男の方は誰だか分からなかったが、女の方はすぐに分かった。

「山岸……ミカちゃん？」

「えっ」

彩の言葉に、康生が山岸ミカを見た。

三田敏と山岸ミカは、ハードロック・カフェの入り口の手前でようやくアルディに追いついた。途中で追いついてきた日本人のカップルも、おっとり刀で追いかけて来た。

「死んだら駄目だよ、アルディ」

「そうよ生きてたらきつといいことあるって！」

敏とミカの言葉を受けて、アルディがふっと笑った。

「しょうがない人たちですね。でももう決められたことです。どうしようもないんです」

彩と康生が駆けつけた。

「アルディお願い、私たちの旅の思い出を汚さないで」

「アルディ、理屈で言ったら負けるかもしれないけど、とにかくあんたのやろうとしている事は間違ってる気がするよ」

「三田さん。ミカさん。彩さん。遠山さん。ありがとう。皆さんのお気持ちは、確かに受け取りました」

アルディは合掌して四人に頭を下げた。

「でも以前に申し上げた通り、ワタシたちには選択の余地がありません。あなた方日本人と違って、やり直すにはこうでもする他ないのです」

アルディは肩から軽機関銃を外すと、四人に銃口を向けた。

「これ以上、ワタシに指示しないでください。もう何も言わない

で。それから、ワタシが中に入ったら、建物からできるだけ遠くに離れることをお勧めします」

アルディはそのまま後じさりすると、ハードロック・カフェの店の中へと消えて行った。

四人は顔を見合わせ、ハードロック・カフェの前から後じさりした。店の中から軽機関銃を発射する乾いた音と、客の悲鳴があがったかと思うと、ドーンと爆発音がして店のドアが吹っ飛び、中から炎と煙が吹き出した。

誰も何も為す術がなかった。

「アルディ……バカだ、お前」

敏は地面に膝をついた。体にもはや力が入らなかった。己の無力さが、身にしみた。

「山岸ミカさん。まさかこんな所で会えるとは思いませんでした」その声に、敏は顔を上げた。先ほどの日本人のカップルがミカに詰め寄っていた。

「おい止めろ。何なんだお前ら」

敏は立ち上がり、ミカと二人の間に割って入った。

「お願いだ。もうCMに出るのは止めてくれ」

カップルの男の方　遠山康生がミカに頭を下げた。

「あなたがウチのCMに出るようになってから、自殺者が急増したんだ」

「あなただったのね」

ミカがなじるように言った。

「アタシを脅迫してたのは」

「何だ。一体どうなってる」

パトカーや救急車、消防自動車サイレンをかき鳴らし、現場に集まりつつあった。敏はミカの手を取った。

「行こう。こんな所でぐずぐずしていたら、テロリストの仲間だと思われるかもしれない」

それは敏にしては珍しく懸命な判断だった。敏はミカの手を引い

た。

「さあ行こう。早く!」

しかしミカは敏の手を振り払った。

「あなた、一体何者? どういう目的でアタシを脅迫するわけ?」

ミカは康生に食ってかかった。

「俺は……遠山と言います。あなたがCMに出ているサラ金の社員です」

「そんな頭のおかしな奴に構ってないで、早く逃げるんだ」

敏は再びミカの手を引いた。

「嫌よ……もう逃げるのは嫌」

ミカが康生を睨み付けた。パトカーから走り出たインドネシア人の警官たちが、銃を構えて四人を取り囲んだ。

「おいよせみんな! 落ち着くんのだ」

警官に全面降伏するように両手をバンザイの形に上げると、

何でこんなことになっちまったんだろう

とどこか他人事のように敏は考えていた。

END



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1747m/>

---

ボロボドゥールとバリの闇

2010年10月11日08時22分発行